

# 序文とあとがきから見た 既刊パンフのリスト

～ 1 9 9 3 ・ 1 ～

## α篇への序文

批評集の企画のモチーフが最初に訪れたのは、現段階でγとよんでいる批評群を総体として把握した瞬間であった。その瞬間までには、時の楔通信発行委託プラン以降の長い模索があったのだが、γについて具体的な作業をしている過程で、現段階でβとよんでいる領域の重要性に気付いた。それでもまだ、現段階でαとよぶ領域については、かすかに意識していたとはいえず、どのように手をつければよいのか判らない状態が続いた。

γやβの刊行がすみ、関係性の連動によって表現集や発言集のα、β化が具体化し、βの場合はα統V篇まで刊行する見通しを立てた後になって、やっと、浮力が不足していた船が水位の上昇に支えられる感触で、α篇の新しい構想が生じたのである。これまでα篇の具体化についての構想を妨げていた要因があるとすれば、象徴的な例として、①神戸大学教養部広報の全バックナンバー、とくに第二二、二五、三〇号は、それ自体が、すでに松下問題を特集するα篇の各分冊であり、また、②公判調書を主軸とする裁判関係の資料についても、本格的にとりくむならば、一〇〇分冊を単位とするα篇企画が必要になるだろうという予測であった。①については、それぞれが②について、すでに配布されつつあり(β統篇に収録した岡田書店の在庫書目を参照)、②についてはこの序文の直後に収録してある「松下昇公判調書編集出版会」の壮大な企画の十年を越える宙吊り性の軌跡があった。

この状態を打破するのに最も役立ったのは、γやβの具体的作業や討論集会をへて、媒介的他者総体の視点を仮装して、切迫する自己のテーマや軌跡を、問題と表現の原初性からとらえかえすという経験であり、その方法の身体化であったと思う。そして、α篇の最初の一冊は、国家や大学による第一次批評αのみVを、β篇作成時の示唆を生かして写真や図面に重点をおきつつ抽出し(ただし、こちらから提起した裁判等は、ひとまず除外)、批評の原型のままα複製Vし(ここにはα敵Vの表現を、そのままαバンVへ応用する戦略もこめら

れている。)、その総体をα読者Vの前に投げ出してみよう、というひらめきが刊行委を訪れたのである。α読者Vは、それぞれα自分Vに向けられた第一次批評にはじめて出会ったと仮定して、どのように対処しうるかを考えてほしい。しかも考える時間や関係性は極めて制約されている。そのような対処の仕方をふまえて、はじめて、私たちなりの反α批評でもあるこれまでの対権力抗争や表現過程(とりわけ時の楔通信)の根拠にふれ、くぐりなおし、本質的な再審請求として、やり残したテーマ群の発見と止揚を共にこなしていくことができるのではないか。

α篇についても、α、β、γ、δを含む批評集企画についても、また、この企画が思いがけず切り拓きつつある作業方向についても、第一歩は確実に踏み出している。しかし、その次に、どう歩んで行けるか、全く不確定である。しかも、これらの総体でさえも、やりたいこととやるべきことの断片であり、同時に必死に必至の、かつ最短の迂回路である、という感覚が絶えず殺到してくる。これは、ある意味で、六九年の前夜の感覚のα対偶Vである。α対偶Vというのは、不確定なままの試みが状況の基底にとどいていてという確信において六九年と共通であるにもかかわらず、ある試みが直ちに情况的反応に直結しえた六九年とは逆に、この試みの意味が、すぐには、だれにも判らないだろうという思いの構造をさしている。

私たちが、過去の特定の時期や状況に固執しているなどと思いこまないでほしい。むしろ、この作業ほど現在と未来的なものは、まだ、どこにも出現していないのだ、とひそかに誇つてもよいのである。しかし、誇ることは止めておく。私たちのなしえた二〇年間の表現行為は、極めて不十分な、偏差に満ちたものであり、その自覚と止揚なしには、α死者Vたちを復活させうる未来に、この企画はとどかないことをなにもものが示してもいるのだから。

一九八八年十月

## α続篇への序文

批評集αの続篇と、βやγの続篇には、大きい差異がある。それは、βやγの続篇は、それまでの刊行作業の期間以後に出現し発見した資料の可能な限り全てから時間順に構成されているのに対して、αの続篇は、前記の時間の流れを一挙に飛び越えてα系批評の最終形態を配列していることである。

この方法をとる理由は、基本的には、α系批評の量的な多さのために、膨大な批評群から極く一部を抽出しなければならないことから来ており、それはα篇、α続篇の双方に共通するが、α続篇に関しては、次のような方が正確であろう。国家による批評としてのα系批評は、β、γ系批評とは異なり、中断されることなしに、制度のダイナミズムによって、現段階の国家的批評の最終的な形態に行きつく。裁判の1→2→3審の判決や決定が、その代表例である。そして、最終形態の水準が、最初的水準に比べて、どれほどの解体と居直りをみせているかを、まず開示し、それによって、最初と最後の間に展開された反α系批評の領域を( )のように逆照射していくためには、βやγの続篇の帯びている放射的な時間性ではなく、包囲的な時間性的の方法を用いることが不可避であった。

α続篇を刊行する具体的な契機を、いくつか指摘しておこう。

一……一九八九年三月十日付で、〈神戸大学〉闘争に関する最高裁による実質審理抜き最終決定が出たが、二十年前の最初の批評との落差が最大である意味について表現論的な反批評をしようと試みた。(前記の上告棄却決定と、その後で形式的にのみ可能な異議に対する、僅か一ヵ月たらず後の棄却決定の間にさえも、α系の批評主体の根拠を粉碎するテーマがあることを、四月一八日付で表現し、このパンフにも掲載している。)

二……時の楔通信・第(15)号(一九八六・七)以後の( )公判の経過を、第(16)号発行委託プラン(一九八七・三)以後の、時の楔への／からの通信(一九八七・九)の七ページで示唆したような(公判系ごとの時間的記述と垂直交差する各上告位相の表現のみの横断的パンフ)の具体化として提起しようとした。(関連する記述をこのパンフにも掲載している。)

三……α続篇のプランは、すでに十年前にワープ的に構想していることに気付いた。時の楔( )語……に関する資料集(一九七八・十)には(印刷所としての裁判所や刑務所)という発想がある。(関連する記述をこのパンフにも掲載している。)(この時期の少し前から裁判過程の三審判決が始め、判決書には、こちらから提出した最終的な主張(上告趣意書)が裁判所によってタイプ印刷され、判決書に併合され、判例として国家水準で保存されることが判った。刑事事件で服役する場合には、刑務所内の印刷所で技術を身につけることを楽しみにもしていた。ところが、私の主張を国家水準で印刷し保存することの危険性に気付いたのか、その後、現在までの裁判所の最終判断は、判決ではなく、(上告趣意書の添付が不要な)決定や命令という形態をとるようになっていた。そのために、このパンフでは、私の主張の部分は原表現の対から補充し、さらに、補充せざるを得ない経過を批判するために、α系の最終判断にかかわる数個の相互の表現も補充した。幸か不幸か、実刑判決で服役していないので、刑務所で習得した技術でパンフを出すに至っていないが、この序文を含めて、各パンフ群を、共闘者から提供されたワープロで打ちつつ刊行している私(たち)は、(監獄的情况)にいるのだ。

α系批評のうち、一〇二三審の判断の形態をとっているものを、時の楔通信第(15)号に掲載されている経過の現在を開示するためにも、裁判過程ごとリスト化し、掲載されているパンフを指示した。(たんに「通信」としてある場合は、時の楔通信をさす。)未掲載ないし部分的掲載のものは、希望者に全文のコピーを配布可能。また、闘争過程総体との関連は、「ファウスト」的な試みでもある「神戸大学闘争史」年表と写真集」を参照していただきたい。

神戸大学闘争(刑事)

- 一九八一・一〇・二八 神戸地裁一審判決(通信第(5)号3頁9ページ、全文)
- 一九八五・九・一〇 大阪高裁二審判決(通信第(14)号2頁4ページ、全文)
- 一九八九・三・一〇 最高裁三審決定(α統篇6頁24ページ、関連表現と共に全文)

卵裁判(刑事)

- 一九七六・六・八 岡山地裁一審判決(五月三日の会通信第22号8ページ、全文)
- 一九七八・一一・一 最高裁三審判決(通信第(0)号24ページ、添付の趣意書を除く全文。α統篇25頁36ページ、関連表現と共に全文)

判決文(化事件(刑事))

- 一九八五・一一・一五 東京地裁一審判決(通信第(14)号11頁13ページ、全文)
- 一九八六・五・一三 東京高裁二審判決(通信第(15)号33頁34ページ、位相のみ)
- 一九八七・七・一四 最高裁三審決定(α統篇37頁56ページ、関連表現と共に全文)

神戸大学A四三〇研究室公判(民事)

(国からの)仮処分申請(を承認する決定に対する)異議

- 一九七三・六・一三 神戸地裁一審判決(メタ第40号第41号、全文。五月三日の会通信第15号2頁10ページ、全文)
- 一九七四・七・一八 大阪高裁二審判決(同前第24号38ページ、位相のみ)
- 九・二 大阪高裁上告状却下命令(α統篇57頁58ページ、全文)

(国からの)使用妨害排除請求

- 一九七六・四・二八 神戸地裁一審判決(五月三日の会通信第22号20ページ、主文を含む位相のみ)
- 一九七七・六・二九 大阪高裁二審判決(通信第(0)号25ページ、主文のみ)
- 一九七八・四・一三 最高裁三審判決(同前31頁32ページ、位相のみ。α統篇59頁62ページ、全文)

人事院審理

一九八二・三・二六 判定（通信第（7）号17ページ、位相のみ。 $\alpha$ 続篇63頁81ページ、全文）

一一・二 再審請求却下決定（同前82頁83ページ、全文）

人事院審理再開請求（第一次行政訴訟）

一九八三・三・一六 東京地裁判決（通信第（7）号14ページ、主文のみ）

一九八四・一二・一七 東京高裁判決（通信第（12）号10頁12ページ、位相のみ）

一九八五・一二・一七 最高裁判決（ $\alpha$ 続篇84頁91ページ、関連表現と共に全文）

人事院判定取消請求（第二次行政訴訟）

一九八六・七・一七 東京地裁判決

一九八七・五・二九 東京高裁判決

六・一六 東京高裁（参加人・清水と竹中への）判決

六・三〇 東京高裁上告状却下命令（ $\alpha$ 続篇92ページ、全文）

一九八八・二・一六 最高裁（前記参加人への）判決（同前93頁95ページ、全文）

国家損害賠償請求（第三次行政訴訟）

一九八四・四・二七 東京地裁は第二次訴訟から分離して審理するという通知をしたが、現在まで公判は開始されていない。

京都大学A三六七資料室に関連する裁判（民事）

（自主ゼミ実行委員会からの）占有確認仮処分申請（ $\alpha$ ）

一九八三・七・八 京都地裁決定（通信第（8）号11ページ、要旨のみ）

九・一四 大阪高裁決定（通信第（9）号16ページ、要旨のみ）

一九八四・三・二九 最高裁決定（通信第（10）号13ページ、要旨のみ。 $\alpha$ 続篇96頁97ページ、全文）

（国からの）占有排除仮処分申請（を承認する決定に対する）異議（ $\beta$ ）

一九八三・九・五 一審公判が開始されたが、八五年以後は中断し、判決が何度も延期されている。

（国からの）明渡請求（ $\gamma$ ）

一九八五・一・二八 京都地裁一審判決（通信第（12）号23ページ、主文のみ）

一九八六・四・二八 大阪高裁二審判決（通信第（15）号12ページ、位相のみ）

六・一六 （被告・竹中への）二審判決（同前14ページ、位相のみ）

一〇・一三 大阪高裁（被告五名への）上告状却下命令（ $\alpha$ 続篇98頁百ページ、関連表現と共に全文）

明渡強制執行を媒介してこちらから提起した裁判群（ $\delta$ ）

通信第（15）号15頁20ページに十五の項目に構成して記述している。それぞれの最終決定判決は、ここでは省略した。現在、全てのテーマを集約して、留置されている動産引き渡し請求事件の公判が京都地裁で開かれており、執行官に対して各参加者が尋問中。

松下 昇へについで(の) 批評集 (8)  
—マスコミ篇—への註

1. 87年9月段階から批評集の作業を実質的に展開している過程で気付いたのは、活字で発表されたものは

$\alpha$  国家・大学によるもの  
 $\beta$  社会的報道

$\gamma$  松下 昇Vを自らのテーマとして論じるものに区分することができ、これまでは $\gamma$ を中心に作業をすすめてきてはいるが(そして $\alpha$ については時の楔通信をふくむ場で止揚してきてはいるが)、 $\beta$ の對象化が空白であること、 $\beta$ は意外に重要であり、 $\alpha$ や $\gamma$ の構造を把握するためにも必要である、ということであった。また率直にのべて、大まじめな $\alpha$ や $\gamma$ の記述よりもむしろ、本質をついているものが少くない。これは包括的に概読すれば納得されるであろう。

2.  $\beta$ の資料として、基本的にマスコミの新聞・雑誌(感覚的にいいかえると、一地方ないし全国性の住民が社会的に均一の情報回路として入手しうる活字表現。それゆえにこそ、ある意味で大衆のみならず、 $\alpha$ や $\gamma$ の表現主体の幻想性に与える影響を無視しえない。)から批評集の作業目的に役立ちそうなものを抽出した。刊行委の未知・未入手のものについて、ご教示を歓迎する。なお、例外的にマスコミ以外のものを数点加えているが、これは $\gamma$ の構成に、マスコミ掲載分を数点加えていることに対応し、この交錯領域の意味の追求も必要であろう。

3.  $\alpha$ の表現をへ原稿Vとして掲載してへ原稿料Vを入手したり(松下昇発言集の「私に対する四つの文章」参照)、そのままへ古本VとしてへバンVに変えたり(例へ神戸大学教養部広報)して成果を上げてきた方法が、現段階において表現論としても、より高次に構想されていること、この作業が、 $\alpha$ ・ $\beta$ ・ $\gamma$ の意味を、 $\gamma$ の「非活字」・非文字の深さから転倒的に生かしていくであろうことをのべておきたい。

87年11月

松下昇批評集刊行委員会(準)

## マスコミ篇 (続) の刊行に際して

一九八七年一月から配布を開始した批評集(主としてマスコミ報道—β系とする)に欠落していたものを補充し、(続)として刊行する。今回は、大学や人事院や国が、公的抑圧力をもつ批評(α系とする。総体を批評集α篇として準備中)である広報や裁判などの証拠書類の中でもちいた新聞記事の一部を応用し、数種類のハ脅迫状V(多くは、大学当局が留置中)も、マスコミ報道に誘発される非活字のβ系批評として併合した。また、β系からはみだす岡田書店の在庫書目、103通信、第A2V号を参考資料として加えた。

β系批評の総体に対してのストレートな反批評は、今は主要な課題としない。むしろ私たちは、

一 記事の作成主体やメディアの位置、意図にかかわりなく浮かびあがる原資料性(社会総体に一定の影響力をもちうる)を、包括的に止揚する。

二 β系に限らず、α系やγ系(ハ松下V論)の批評が踏み込みえていない領域の共通性と差異を逆照射する。

三 一九六九年以降の状況をくぐった任意の人について、具体的なハ大学V闘争への関わりの有無とは関係なく、この企画のように、α、β、γ系の批評集を構想してみる時のハ松下昇Vにおける、驚くべき均衡にみちた不均衡性(あるいは、不均衡にみちた均衡性)

は、どこからくるのかをさぐる。  
という諸点に比重をおきたい。

一に関連してのべると、α系やγ系(ハ松下V論)に多くみられる、狭い共同性内部の了解、流通範囲とは異質なβ系の言語形態には、不満よりは解放感をあたえるところがあり、マス(大衆)が拘束されつつ支えている幻想的規範と本格的にとりくむ媒介となりうる。

二に関連してのべると、例えば、東大における中沢非採用問題よりも、はるかに巨大な意味をもちうる一九七〇年代の京大における松下昇、末宇非採用問題を、批評者たち(β系のみならずγ系も)が、とりあげ得なかった経過は、先行、潜行性についても私たちの自信を深めてくれる。

三に関連してのべると、マスコミ篇の作成過程において、なぜか、芥川竜之介が、イエス・タリストやハインリッヒ・ハイネを、そして自らをジャーナリストと呼んでいることを思い出していた。

そのように呼び得る位置と根拠を生きようとするのが、批評集を構成したり、本質的に読んだりする前提条件の一つではないだろうか。

一九八八年九月

## 松山下 昇へについで(の) 批評集 構成

1	菅谷規矩雄	「記録者の幻想」	暴走 13号	63年6月
2	佐々木幹郎	「ハ黙秘Vの受肉」	同志社詩人	69年6月
3	中野晴文/橋本	要(カメラマン)		
4	北川 透	「大学闘争のなかで自己を発見した」	アサヒグラフ	69年7月
5	吉本隆明	「反戦後の情況への楔」	週刊読書人	69年8月
6	赤木真澄	「情況への発言」	試行 28号	69年8月
7	佐々木幹郎	「ハVのむこうにあるのは何か」	メタ 3号	69年11月
8	佐々木幹郎	「戦闘への黙示録——ハ松下昇V序説」	現代詩手帖	69年11月
9	野村 修	「戦闘への黙示録——ハ松下昇V序説」	犯罪	70年9月
10	飢餓群団	「松下講師の処分」	京大新聞	70年9月
11	北川 透	「戦闘宣言」など	前史 ハ1V	70年11月
12	佐々木幹郎	「松下昇表現集について」	松下昇表現集	70年12月
13	赤瀬川原平ほか	「70年アンソロジーについて」	現代詩手帖	70年12月
		「現代論壇考」	現代の眼	71年1月
14	佐々木幹郎	「水の楽器——わがハ法廷V」	現代の眼	(73年1月も参照)
15	村尾建吉	「白夜通信」	辺境 3号	71年1月
			白夜通信 1号(手書きコピト)	71年3月
16	池田浩士	「写真劇『第一回公判』(1幕4場)」	五月三日の会通信5号	71年3月
17	加藤典洋	「不安の遊牧」	現代の眼	71年3月
18	天沢退二郎	「松下昇——不可能の表現者」	現代の眼	71年5月
19	菅谷規矩雄	「ハ研究者Vの文学的頽廢(1)」	発表の場不明	71年5月?
			(ガリ刷り)	
20	森崎和江	「『松下昇表現集』を読む」	日本読書新聞	71年2月
21	滝沢克己	「『松下昇表現集』を奨む」	RADIX 4号	71年6月
22	ハV幸治	「ハ六甲Vからの無限の遁走」	岡山救援通信13号	71年7月
23	金本浩一	「吉本隆明*松下昇への諸註」	ハメタV20号	71年7月
			27号	72年4月
24	岡田 啓	「遠い夢(松下昇)への覚書・1」	有時 1号	71年7月
			2号	71年12月
25	岡田 啓	「ハ仮装組織論Vへの問いかけ」	有時 3号	72年5月
26	折原 浩	「いくつかの問題提起」	五月三日の会通信8号	72年2月
27	滝沢克己	「折原氏の問題提起に想う」	日付け得ないV71.11.28ハをめぐって	72年2月
			——『相互批判の確実な基礎』を求めて	72年2月
28	池田浩士	「ハ松下昇Vはパンをいかに食うべきか」	五月三日の会通信10号	72年5月
29	佐々木幹郎	「日常性をめぐって(座談会)」	詩学	73年2月
30	小田・鶴見・吉川編 浅野利昭			
		「市民の暦(10月16日の項)」	朝日新聞社	73年8月
31	折原 浩	「東京大学——近代知性の病像」(あとがき)三一書房		73年11月
32	北川 透	「証言あるいはハ六甲Vへのノート 1」	日本読書新聞	74年1月
			6	74年1月
33	堀田 護	「神戸大 松下昇氏の場合」	救援	75年4月
		——六甲風光案内		
34	佐々木幹郎	「詩が作者をさがす(1)」	現代詩手帖	75年6月
		(2)		9月
35	芹沢俊介	「ハ批評の原理Vとハ批評の運命V」	磁場 4号	75年2月
36	滝沢克己・萩原 勝	「往復書簡・思想の原点を問う」	RADIX 7号	75年7月

37	宮内康夫	「鉄格子の大学から」	公開自主講座「大学論」	75年10月
38	北川 透	「詩と批評の闇渠（同時代覚書）・1 —△芸Vの論理批判からはじめて」	現代詩手帖	76年4月
39	墨岡 孝	「未完の組織・不可視の組織—松下昇論— (I)~(IV)」	詩の世界 6号~ 11号	76年11月~ 78年6月
40	間 章	「時代の未明から来るべきものへ」 (破片録 石原吉郎さんの死)	初出誌不明 (のちイザラ書房)	78年12月
41	浅野利昭	「現代人物辞典(松下昇の項)」	朝日新聞社	77年3月
42	西沢朝登	「政治の中の行動考 △III V」	乾坤 4号	78年6月
43	佐々木幹郎	「巡礼—エルンスト『カルメル修道院へ 入ろうとしたある少女の夢』より」	現代詩手帖	78年9月
44	五十嵐良雄	「大学教師の虚像と実像(座談会)」	現代の眼	79年5月
45	瀬尾育生	「裡面の河 —松下昇『六甲』をめぐる覚書(上)、(下)」	現代詩手帖	79年9月~ 10月
46	Klaus Briegleb "Literatur und Fandung"		Carl Hanser Verlag	79年
47	{自主ゼミ}実行委員会訳	「あるドイツ文学者の闘争とハイネ論」	京都大学新聞 《第三領域》3号	80年9月 81年5月
48	高橋秀明	「松下 昇ノート(上) (2)」	匙 6号 作業 4号	82年9月 82年12月
49	小川正巳	「虹の橋への祈り」	神戸大学新聞	82年12月
50	安田 有	「作業ノート」	《第三領域》6号	83年4月
51	星をみたい人	「永続する大学闘争△1 V」	批評精神 5号	83年10月
52	高橋秀明	「△2 討論をめぐるメモランダム」	△門司大里教会V月報	83年10月
53	池田浩士	「全共闘残党派が『遂に戦取!!』した」	大和書房	84年8月
54	山本 聖	「未知なるものへの祈り(△説教V)」	未来	84年6月~ 12月
55	兵頭正俊	「ゴルゴダのことば狩り」		
56	北川 透	「わが執着われら難破船 — 『あんかるわ』の二十二年」	文芸 新泉社	85年2月 85年3月
57	松下竜一	「記憶の闇」 (Mへの言及部分)	九竅 2号	85年7月
58	山崎一夫	「戦後革命運動辞典・松下昇の項目」	自主出版詩集	85年9月
59	野原 燐	「ゲイデルの拘置所」	九竅 3号	85年12月
60	上原孝仁	「跨線橋まで」 (往復書簡IV)	而シテ 16号	86年7月
61	野原 燐	「北川透への手紙」	住宅建築	87年1月
62	高堂敏治	「自在なる詩想の器—『あんかるわ』小論」	ワイプロ原稿	87年6月
63	宮内 康	「楽しげなスクウォッターたち」	ワイプロ原稿	87年7月
64	みき ゆうこ	「迷夢(詩)」	時の楔△へのV通信	87年9月
65	みき ゆうこ	「祭りの後(小説)」		
66	仮装被告団	「△ V ~ △ V」		

0. 松下 昇の表現(広い意味で行為を含む)に関して活字の位相で発表されていることが判明している表現群を前記のように構成してみた。例外的に、13、17を加えている。また66は別パンフとして、併合的に配布中。

1. 仮装性をこめて、少くとも、次のメディア群を批評集の各A別冊Vとしても想定している。これらのメディアに発表されたものは、少数の例外を除いて、掲載していない。

試行 1号(61年9月)〜66号(86年11月)〜

あんかるわ 1号(62年8月)〜77号(87年9月)〜

△メタV 1号(69年10月)〜44号(74年7月)

RADIX 1号(70年2月)〜8号(76年11月)

岡山救援通信 1号(70年4月)〜30号(73年8月)

五月三日の会通信 1号(70年7月)〜26号(81年12月)

白夜通信 1号(71年3月)〜12号(72年3月)〜

△白夜通信1V(75年7月)〜△白夜通信22V(87年4月)〜

(初期の番号が手書きコピーである他はガリ刷り。74年4月段階までのものは全てあんかるわに転載)

「伝習館」を考える大阪の会・会報 1号(71年6月)〜106号(87年10月)〜  
有時 1号(71年7月)〜6号(78年5月)

△解体新書V通信 1(71年12月)〜8(73年5月)

(ガリ刷り、のち「あんかるわ」深夜版として74年1月に刊行)

(大学教員)救援通信 1号(76年7月)〜26号(87年9月)〜

時の楔通信 △OV号(78年11月)〜△16V号(87年7月)〜

△門司大里教会V月報 △OV号(80年3〜4月)〜△48〜V号(そのV)

(87年11月)〜(△44V号の次号から、手書きコピー)

恋涯 創刊号(80年5月)〜

《第三領域》<sup>1+</sup> 1(80年6月)〜7<sup>+</sup>(84年3月)〜

同時代建築通信 1号(83年3月)〜14号(87年7月)〜

〜103通信〜 △OV号(83年4月)〜6号(85年9月)〜

霹靂 1号(87年11月)〜(手書きコピー)

2. 活字による表現は、前記の他に神戸大学速報、同教養部広報、裁判関係資料、処分関係資料と共に、マスコミ等の記事について、総体のリスト化の作業をおこないつつあり、回覧や応用を歓迎する。

3. 非活字位相のピラ、レジュメ、書簡、討論記録、発言メモ等についても同前。

4. 文字になっていないテープ、写真、絵等についても同前。

5. 今回の試みは、松下昇についての批評が、この十数年にどのような質と軌跡をもっているかを確認し、それらが与える示唆に込めつつ、私たちのこれからの表現に生かすためにおこなう。「神戸大学闘争史」発行過程の宙吊りや、△時の楔通信V発行委託プランを含む現情況のテーマとの関連において。

6. 資料の補充〜リストの再構成に関して、また各項の資料のうち神戸大学A430、京都大学A367から国により押収〜留置されているものの返還の実現に関して、ご意見や共同作業を期待します。

〜87年11月〜

松下昇批評集刊行委員会(準)

松下

目升へについて(の) 批評集γ篇 (統) 構成

- 1 松下 昇 「山本元ずりとやくそく」 (エンピツとクレヨン書き) 43年6月
- 2 菅谷規矩雄 「詩的情況論序章」 ユリイカ 70年3月
- 3 滝沢克己 「神戸大学教養部湯浅光朝教授会メンバーあて書簡」(万年筆書き) 70年3月  
(RADIX 2号 70年6月)
- 4 折原 浩 「神戸大学教養部各位への抗議ならびに要請」 (万年筆書き) 70年3月  
(「人間の復権を求めて」71年中央公論社)
- 5 菅谷規矩雄 「斜面にへばりつく猿でないなら、人間として直立せよ!」 (ボールペン書き) 70年3月  
(「自己組織への序——菅谷規矩雄表現集」前記編集委員会 73年2月)
- 6 菅谷規矩雄 「ハ松下V処分粉碎総決起集会への発言」 (同前) 70年8月
- 7 中井隆久 「オレの墓碑銘は、拒否」 朝日ジャーナル 71年2月
- 8 菅谷規矩雄 「求釈明書」 (ボールペン書き) 71年5月
- 9 北川 透 「ハ水平線V」 茫々乎通信4号ガリ刷り 71年6月
- 10 鉄(コラム署名) 「ハ表現運動Vと自立誌」 日本読書新聞 71年7月
- 11 菅谷規矩雄 「松下処分にかんする人事院審理への発言」 解放学校通信 ガリ刷り 71年7月
- 12 南山大学仮装被告仮装処分者団 「《宣言》」 南山大学新聞 71年12月  
(ガリ刷り原本のコピーを併合して掲載)
- 13 亀矢東西 「夜夜腿断から昼昼肛炎」 ガリ刷り 72年11月
- 14 北川 透 「ハ証言Vの根拠」 あんかるわ 32号 72年11月

- 15 池田浩士 「支配者の、総括、を超えるものを」 情況 73年8月
- 16 菅谷規矩雄 「天沢退二郎II序説」 「詩的60年代」イザラ書房74年9月
- 17 松下昇公判調書出版会H・M・S 「ハV裁判あるいはハV闘争の現情況について」 上記出版会のパンフ 75年2月
- 18 菅沢邦明 「ドイツ語の本・書評」 指 309号 77年6月
- 19 宮内 康 「日録」 日本読書新聞 82年6月
- 20 山本 聖 「永続する大学闘争」 ハ門司大里教会V月報20号82年12月
- 21 野原 燐 「ハあやとりVへの註」 市9号(手書きコピー) 85年1月
- 22 竹中とき 絵 (エンピツ書き) 86年4月
- 23 竹中まい 絵 (エンピツ書き) 86年4月
- 24 竹中みな 絵 (エンピツ書き) 87年8月
- 25 北川 透 「社会的存在としての詩とはなにか」 (瀬尾育生との対談) 「北川透 全対話」 風琳堂 87年8月
- 26 由木しげる 「特集『60年代詩をめぐって』のアンケートについて」 オーバー・フェンス11号 87年10月
- 27 T(氏名非公開) 「ハXデー問題Vの発端をなす行為」 岡山大学学友会事務局 87年11月22日
- 28 北川 透 「修羅シユシユシユ、菅谷規矩雄との交渉史一面」 現代詩文庫「菅谷規矩雄詩集」 思潮社 87年11月
- 29 友田清司 「松下昇批評集をめぐる討論集会に寄せて」 ワープロ表現 88年2月
- 30 野原 燐 「狭くない共同性とはなにか?」 ワープロ表現 88年7月

批評集γ篇に収録した時期(一九八七年十月)について欠落していたものを1と25に、その後に発表されたものを26と30に収録した。1は、少年時の松下から現在の松下への批評として収録した。この他に補充すべき批評も多くありうるし、とくに八一年四月一日の「恋涯」同人と芹沢俊介氏による△松下▽を批評する座談会記録の存在も確認している(△白夜通信11▽に全文が全面的批判と共に掲載されている。)が、参加者ゝ掲載者への提起との関連から、ここでは存在を言及するにとどめておく。(ただし、反批評の予告である、時の楔通信第△4▽号の「評論家による△処刑▽」は参照していただきたい。)

また、27は、一人でβ篇の印刷作業中の△松下▽を、長年にわたる△大学▽の諸悪の根源と見なし、酔った勢いで△暴力▽を加えようとした体育サークルの学生の行為(ただし、かれが△松下▽のある媒介的行為のために足をすべらせ、振り上げた会議用机と壁に挟まれて、氣絶したのが真相であるが)を、現状況における象徴的な△批評▽として取り上げた。関連資料は配布可能。

最も比重を置いて言及すべきかも知れないのは、批評集とりわけγ篇の系列に関して一九八八年一月から持続的に、さまざまな場所で開かれた、批評集をめぐる討論集会の経過および、各批評への反批評の内容であるが、これは今後も持続していく(α、β、γ、ゝ系批評に交差する)反批評作業のn次の展開に参加しつつ確認ゝ創出していただきたい。それらの成果を開示する方法ゝ形態は不確定であるとはいえ、必ず私たちの表現として生かしつつ、公開していく。

これまでの討論集会の設定の位相についてのみ記すと、第一回は、γ篇の全執筆者ゝ当事者に均一に連絡し、第一回の参加者ないし応答者に対してのみ第二回の連絡をした。(それぞれ、添付する招請状参照)第三回以降は、特に刊行委として企画ゝ招請せず、任意の人ゝ関係性が△招請▽する時△空間で展開している。詳述はしないが、第一回と第二回が包囲するテーマ群ゝ会議の開き方は、第三回以降への方向づけを含めて、現状況の表現領域における最高度の達成であるという確信がある。もちろん、参加者全てに、均一にその感覚が共有されているとはいえないにしても、何かが始まったのだ、という戦慄は、だれもが否定しえないであろう。今後も私たちの試みに注目し、刊行に関連するどのような提起をも遠慮なくとどけていただきたい。

一九八八年十一月ゝ

## 表現集の「V」化について

一九七一年一月に、あんかるわ別号『深夜版』として刊行された松下昇表現集は、北川透氏の熱意と、時代的な好条件により、七〇年代の前半には、数千部の配布が完了し、以降、古本屋などで、かなりの高価な「本V」として存続してきている。

すでに、七〇年代はじめから、北川氏は、表現集の増刷と続篇の刊行を提案していたが、私は、なかなか気がすまなかった。その理由の基本は、北川氏が表現集の最後のページの註に記していることに関連するが、私が、ここに収録されたものを含む私の全表現を「前史的表現V」とみなしており、その前史性が私個人よりも深い状況性にもとづくであろうという直感もあったために、刊行の持続に何重ものためらいがあったからである。また、「いつか私の前史的表現について、執筆、刊行、転載……のずれを含めて表現するだろう」とし、その作業の中で続篇についても構想したいと予告しつつも、果てしなく続く表現過程の激動の中で、既刊行のものに對置するという水準では具体化しえなかった。

一九七九年六月には、私の非力を批判的に援護するようにして、東大闘争で服役後、古書店で働いていた久住幸治氏により、表現集以降の活字表現を中心に収録したコピー風の松下昇表現集が出され、はじめは貸本として回覧され、後に、いくらかの補充をして「一〇三出版」によりファックス化され配布された。数百部がなくなった後、さらに六九年段階からの東京都助手共闘連合のメンバーにより、数百部マスブリと配布がおこなわれた。

表現集も発言集も、私の発案というより、共闘者による、既成の「本V」の概念をこえようとする試みであるが、ここには大きい啓示がある。その一つは、表現集の内容が、論文とか小説とかというジャンルの枠を突破して何かへなだれ落ちる、ないし飛翔する方向性を持つており、「表現V集」として辛うじて把握しうる瞬間を示していることであり、もう一つは、例えば「状況への発言V」が、マジック・インキで記され、掲示板にはり出されて以降の筆写「何重もの活字化」コピーを含む応用の総体が、表現過程状況を「身体V」とみなす場合の「

発言V」という位相を帯びてしまうことである。

このような表現集や発言集の出現を媒介する意味の総体を、私がかかわってきた全ての「かかれつつあるものV」へかたられつつあるものVおよびそれらの背後にある領域について応用したい、と願いながらも、殺到してくる裁判過程や、それに交差してくる諸テーマと格闘するために、辛うじて、時の楔通信各号を発行し、ごくまれに共闘者のパンフや雑誌に文章を掲載してきたというのが実態である。

一九八七年九月から、ある方法的予測にもとづいて、この二〇年間、私に関してなされてきた批評群の総体を批評集として刊行し、ファックス刷りで配布する過程で、表現集や発言集を読んでいる読者層から、それらの内容にふれたいという声が出てきており、それが表現集をファックスでマスブリして配布する現実的要因の一つになっている。「発言集は、原本が京大A三六七空間の明渡強制執行時に留置されたままなので、ただちにマスブリできず、手許のものを回覧中」しかし、本質的要因としては、批評集という形態を具体化させる情況的一周性が、前述の「前史的表現V」の現在までの「二次的構造」を總体的に止揚しうる表現的一周性と、重なってくる渦動の中に存在すると考えている。

従って、ファックスでマスブリをするという場合、契機としては、かつて出現した形態と内容のものの複製から出立するとしても、方向はむしろ逆に、この二〇年間に「松下昇V」を媒介して、出現している「潜在している表現の膨大な未開示領域」へ迫りつつ、各表現の現段階での再構成「展開」をしていくためにおこないたい。

私の表現というよりは、「大学闘争V」とよばれる世界史的波動の中であふれてきた「表現V」や「発言V」を、拡散と抑圧を加速する、この現在の偏差系のなかで、遠い夢の組織論の武器として再構成し、その向こうへ跳躍しようとするこなしには、「私V」の全ての沈黙も許されない、とつぶやきつつ……

一九八八年八月

松下 昇

松下昇平表現集（続） 構成

- 1 「五八年一二月」 「ハイネにおける幻想の生起と崩壊」 東京大学文学部独文学科卒業論文
- 2 「六二年一二月」 「ドイツ表現主義の諸問題——ブレヒトとペンを媒介して」 前記独文学科修士論文
- 3 六三年八月 「ブレヒトの方法」 神戸大学学内紀要 論集（六三年一二月）
- 4 六三年八月 「ハイネ『北海』における詩と散文の相関性」 神戸大学学内紀要 文学（六四年二月）
- 5 六四年三月 「処置するもの・されるもの」 神戸大学学内紀要 近代（六四年八月）  
同時代演劇（七三年九月）に併合表現と共に転載
- 6 六四年一二月 「奇妙な夜の記憶」 神戸大学第Ⅱ課程新聞（六五年一月）
- 7 六七年一月 「不明確さを構想せよ」——学内作品コンクール選評——神戸大学新聞（六七年二月）
- 8 六七年五月 「H・プロッホ『誘惑者』」（古井由吉訳）について——書評——日本読書新聞（六七年六月）
- 9 六九年二月二日 「情況への発言」（掲示板のマジック表現から処分調査資料として筆写されたもの）  
転載メディア多数—省略—
- 10 六九年三月四日 学外入試会場で配布したビラ（処分調査資料としてガリ刷りから筆写されたもの）
- 11 六九年七月一日 全学集会への批判と提起のガリ刷りのビラ 神戸大学全共闘の出版したパンフ  
および八日 （六九年七月）に転載
- 12 六九年八月八日 「バリケード的表現」（掲示板のマジック表現）試行29号（七〇年一月）と  
神戸大学教養部広報30号（七一年一〇月）に転載
- 13 六九年八月三〇日および  
九月四日 「バリケードの中から（書簡）」 RADIIX1号（七〇年二月）
- 14 六九年九月一六日 「正常化Ⅱ反革命に関するテーゼ」（処分調査資料としてコピーされたガリ刷りのビラ）  
参考資料——松下の共闘者が教室へもって行った松下のメモに関する処分調査委の報告書
- 15 六九年一〇月一三日 「バリケード的表現」（掲示板のマジック表現から処分調査委により撮影し筆写されたもの）
- 16 七〇年一月三日 「なにものかへのあいさつ」（ガリ刷りのビラ）試行30号（七〇年五月）「情況への発言」欄と  
あんかるわ24号（七〇年四月）に転載
- 17 七〇年一月五日 「祝福としての0点」（ガリ刷りのビラ） あんかるわ24号（七〇年四月）に転載
- 18 七〇年一月八日 「反幻想的な問い」（掲示板のマジック表現から処分調査資料として筆写されたもの）
- 19 七〇年五月一四日 「……への問い」（掲示板のマジック表現から撮影されて  
教養部広報22号（七〇年八月）に転載）
- 20 七〇年七月三一日 「裁判を一つの比喩として展開されつつある闘争に関するレジュメ」（青焼きコピー）  
あんかるわ24号に註記と共に転載
- 21 七〇年九月五日 「八八月V闘争の事実性」（青焼きコピー） RADIIX3号（七〇年一二月）に転載
- 22 七〇年一〇月一五日 「処分されているのはいったいどちらか」 神戸大学生協機関紙 砦6号（七〇年一一月）

23 七〇年二月二十四日「仮装としての被告とは何か」(法廷で配布されたコピーのビラ) 情況71年6月号 に転載  
参考資料―第一回第三回公判調書とそれにもとづく写実劇、関連文書等

24 七一年五月一八日 「特別抗告申立書」(野紙) 試行33号(七一年七月)に転載

25 七二年三月 「もうひとつのBRICKIIレンガの中での話」神戸大学応援団機関紙 BRICK27号  
(七二年四月)

26 八〇年四月 「『古本』市のお知らせ」(ファックスのビラ)

27 八〇年六月 「あらたな闘争の展望について」 救援通信14号(八〇年八月)

28 八一年四月 「『古本』市のお知らせ」(ファックスのビラ)

29 八〇年七月二〇日 「仮装被告団からのメッセージ」(メモ) 八門司大里教会V月報A5V号(八一年八月)

30 八一年七月二九日 「『最終意見陳述』書」(野紙) 五月三日の会通信25号(八一年九月)に転載

31 八一年一月一六日 「拡大自主講座のよびかけ」(コピーのビラ) 八門司大里教会V月報A20V号(八二年二月)

32 八一年一月二三日 「連続シンボジウム・テーマの基本的構造」(コピーのレジュメ)  
八門司大里教会V月報A20V号(八二年二月)  
二三日

33 八三年一〇月 「生闘学舎論」 同時代建築通信4号(八三年二月)

34 八四年一〇月 「河川敷・身体・空間」 同時代建築通信8号(八四年二月)

35 八五年六月 「会食メニューへの註」 同時代建築通信9号(八五年七月)

36 八五年一月一二月 「東京高裁の告訴と起訴弾圧について」 救援85年3月号と12月号

37 八六年五月 「不法占拠」 群居12号(八六年七月)

38 八六年九月 「模索舎で時の楔通信を入手される方々へ」(通信A15V号の表紙にホッチキスでとじてある)  
(ポールペン書きのコピー)

39 八七年一月 「印刷されたものを真に生かすための表現過程論(序)」 模索舎通信44号(八七年一月)

40 八八年三月 「関曠野『プラトンと資本主義』について」(書簡) 同時代建築通信16号(八八年五月)

一九七〇年段階の表現集に収録されていない活字表現を、それ以前のものを含めて発表順に構成してみた。卒業論文と修士論文は、原稿のままであるが、その後の表現との関連性から題名のみを示している。回覧は可能。

書簡、メモ群は、まだ未整理であり、別に対象化していく。主として六九〇七〇年に学内で公表したピラ群、揭示群、落書、V群も多数あるが、神戸大学闘争史の宙吊り過程の止揚と共にこなうことをめざしつつ、ここでは、非活字から活字化されたもの、および処分資料として撮影、筆写され公的な意味づけを加重されたことを確認しうる表現を収録している。

読者諸氏にお願いしたいのは、既刊の表現集の各表現と併合して再構成しつつ把握していただきたいことである。できれば、発言集の統編への註の同位相の要請と併合的に展開することも。

統篇の構成の、とりわけ七二年から八〇年までが空白Vの印象を与えるかも知れないが、それは主要な表現の殆ど全てが

五月三日の会通信(七〇年七月〜八〇年一二月)

時の楔通信(七八年一月〜)

独立したパンフとしての

正本ドイツ語の本(七九年九月——これは七七年三月の三一書房版「ドイツ語の本」および八二年三月の熊本版・正本ドイツ語の本への宙吊り原稿と併合して読む必要あり。)

時の楔——ハ V語：に関する資料集——(七八年一〇月)

時の楔への  
からの V通信(八七年九月)

に掲載されているためであることものをべておく。

試行に掲載された六五〜六六年の「六甲」および六七〜六八年の「包囲」は、それぞれ独立したパンフとして、六九年に神戸大学全共闘出版局から、七五年にハ V委員会から刊行されているが、残部は全くない。

なお、批評集、発言集や表現集のハ V版の刊行に際して新たに表現した、それぞれの構成、註や序文、これから刊行していく概念集なども、表現集統篇の構成要素として把握していただきたい。

ある必要から、図書館で本をさがしていて、少し疲れたとき、ふと石川 淳が自選作品に関して書いたあとがき(七一年五月)をみつけ、一読して興味をひかれた。かれは、書いてしまったものは捨てたものであり、それを選びなおして本にするのは捨て直すに等しい。選びなおす極限では無に帰するだろうし、はじめから無のようなものでもあろうが、あるかなきかの夢を求める人のためには三秒位の突っかえ棒にはなるかもしれない、という趣旨を記している。

私の場合、選ぶというより総体を開示しようとし、三秒位ではなく、これからの三世代位への射程をこめているから、石川 淳とは対比的な位置にいるように見えるが、かれのいう核心には深く共感するところがある。だからこそ、かれの示す核心に対応するものを全ての人々状況が共有していくために、まず無力な私の表現を提出してみよう、と一層つよく考えた。

ともあれ、前史的表現を走りなおして跳躍を開始しつつある。次のステップへ!

一九八八年一二月

刊行委員会気付 松下 昇

## 光三集のA V化について

一九七九年六月に回覧用として作成された松下昇発言集の位置や、松下昇表現集との関連については、一九八八年八月付の「表現集のA V化について」で基本的にのべているので参照していただきたい。ここでは次の諸点をあらためてのべておく。

一——発言集の原本は、占拠空間から留置された状態にあり、それにもとづく複製はできないが、この状態を、たんに対権力的な課題にとどまらない広いテーマの対象化の媒介としつつ、その対極にA同一V内容のA V版を構想していく。発言集のA V版の企画は表現集のA V版に触発されて生じているが、これは、表現集や発言集や批評集、さらに、その向こうに拡がる領域へA続V篇を企画していくための不可欠の作業である。A V版に出会う読者は、対極に留置されている原本を意識して読んでいただきたい。

二——原本の宙吊り性と共に、原本作成者にかかわる、もう一つの宙吊り性にもふれておく。原本の作成者は、七九年〜八〇年段階の補充的な註に記したことであるが、古書店で働きつつ回覧用として職場に置いたことを理由の一つとして解雇され、経営者との対立は持続し深化している。そして、解雇した者とされた者は、六九年に同じバリケードを死守していた者同志であったこと、この事実性の現実的意味の追求が発言集を真によむ条件の一つであることを強調したい。

三——原本とA V版の内容の差異についてふれておくと、A V版では原本作成者や複製主体による註を不可視にし、対応して、この序文を掲載している。前記の註は原本からよみとってほしいし、深淵のみならず、註も成長するからである。

「私の自主講座運動」や「私にとって大学闘争とは何か」は、原本に掲載されたものの前段階の掲載分を応用している。これは、より初期の掲載形態をえらんだというわけでもな

く、逆に「七一・一・二九の解放学校における問題提起」は、原本がガリ刷りパンフをそのままコピーしているのに対し、A V版は、その後「あんかるわ」第28号へ転載されたものを、関連資料を含めて応用している。それぞれのメディアの振幅や重層性への視野を拡げるため、と受け取っていただきたい。（なお、表現集や発言集のA V版では、これまでのミスプリ等をできる限り訂正し補充した。）

四——表現集と発言集の差異や特性は何であろうか。前者は文字で発表したもの（唯一の例外は、前出の「私の自主講座運動」）、後者は発言の記録を収録していると一応いえるとして、本来はA V過程における表出行為を全てA作品Vと把握する（なぜなら、バリケードも、眠りも、n年間の関係性の変化も、なにものかによるA作品Vである。）場合のある構成へのすくいとり方の媒介が文字や発語を基準とすることもあるというにすぎない。あらかじめA文字Vで書かれたとみえる表現も、背後に沈黙のA発語Vをくぐっているし、A発語Vとして聞かれる表現も、不可視のA文字Vを背負っているだろう。それらを、どの水準でとらえて開示するかは、現在をふくむ場の幻想性の必然の度合いが決定する。

五——この場合、私たちは「↓非文字↓文字↓」のベクトルは可逆的でもあり、各項は等価であるという前提から出立し、それぞれを最大限に生かしたい。従って、今後、表現集や発言集の作業を充実させつつ（それぞれ、欠落し持続している多くの表出行為を収録した統篇を準備中）、未踏のさまざまな試みをしていく場合にも、文字や発語の区分を固定化せず、これらを仮装するA条件Vと呼吸感覚を発見し再構成しつつ、前史的拘束性からの飛翔を目ざしたい。

一九八八年九月

松下 目升

- 1 六八年七月五日 「反権力の自立的拠点」 清水正徳氏との対談 展望（神戸大学総合雑誌）18号（六八年九月）
- 2 六九年二月二七日 「新・告知板への発言」 アサヒグラフ 六九年三月七日号
- 3 六九年三月八日 「表現の变革と機構解体」（電話インタビュー）日本読書新聞 六九年三月二十四日号
- 4 六九年五月七日 「機構の变革あるいは表現の变革」（自主講座における発言）神戸大学新聞六九年四月一日号  
参考資料——六九年六月一六日付の「バリの中から」第一〇号 △自主講座Vの△テーマV系列表（ガリ刷り）
- 5 六九年十二月一四日 「都立大学・解放学校の討論記録」（ガリ刷り。表現集掲載分と連続）
- 6 七〇年一月一四日 「神戸大学教養部教授会議事録」（△非合法Vのガリ刷り）
- 7 七〇年六月一三日 「京都大学・処分粉碎集会における発言要旨」大学を告発する全学教官連合機関紙No1  
（七〇年六月）
- 8 七〇年十一月一八日 「自主講座運動を媒介とする表現变革運動」姫路工大の大学祭における発言要旨（タイプ印刷）
- 9 七一年十二月一八日 「南山大学における△委託Vに関する会議再録」（ガリ刷り）
- 10 「七六年一〇月二六日」京都大学における三一書房版『ドイツ語の本』に関する会議再録」（ボールペン原稿）」
- 11 七六年十二月二日 「神戸大学△B一〇九Vの自主解放講座での発言」（ガリ刷り）
- 12 「七六年十二月二日 10と同じ」
- 13 「八〇年五月二九日」教育を巡る60-70-80パネルディスカッション」  
参考資料——救援通信14（八〇年八月）の記事  
東京神田の全電通会館の集会における討論のテープとメモ群」
- 14 八〇年十一月二六日 「AURA設計工房における青山学院大学・全学闘争委員会メンバーとの討論」（回覧用のボールペン△コピー刷り）
- 15 八一年六月七日 「門司大里教会△礼拝Vにおける発言」 月報10号△11号（八二年二月△三月）
- 16 八二年六月九日 「大学闘争と言語の問題」（熊本大学における公開授業）パンフ「狐と猫と月」（八二年九月）
- 17 八二年十二月一六日 「生闘学舎の建設をめぐる」（パネル・ディスカッション）  
東京池袋の豊島区民センターにおけるシンポジウム 同時代建築通信第一号（八三年一月）△第三号（八三年九月）
- 18 八四年十一月三日 「日本基督教団総会（箱根）における発言」 △門司大里教会V月報44号（八四年十二月）
- 19 八五年十二月六日 「空間の変貌——六〇年代の都市と建築」（パネル・ディスカッション）  
17と同じ場所のシンポジウム 同時代建築通信第一四号（八七年七月）△第一五号（八七年十一月）  
「参考資料——テーマが「全共闘運動と六〇年代」から変貌していく過程の紙片群」
- 20 八八年二月一〇日 「最高裁判所の建築批判」（電話インタビュー） 日経アーキテクチュア 八八年四月四日号

既刊の発言集に収録されていないものを集めてみたが、構成に記したものの他に一九六九年(とりわけ、バリケード期間中)の神戸大学B一〇九を中心に連日おこなった自主講座における発言

一九七四年から数年間、毎週一回の京都大学の制度を逆用した自主ゼミにおける発言  
一九七五年以降、ほとんど毎年参加してきた岡山大学祭連続シンポジウムにおける発言  
一九七〇年以降の闘争、裁判、表現等に関する会議における発言(裁判や人事院審理の速記録は百冊単位で別にある。)

一九八八年一月から開始している批評集に関する討論集会における発言

の拡がりにおいて、もし技術的に可能ならば全ての発言を再録して検討し応用の対象にしたい。しかし、まだ部分的にしか具体化しえていない。これからやるべき不可欠の作業群の一つの項目として掲げておく。

読者諸氏が、まず、既刊の発言集の各発言記録を、この統編の1120と併合し、テーマ時間系列で再構成して把握しつつ、前記のどれかの対象化作業へ、さらに未だ発言されていないヴィジョンの創出へ共に出立していただければ、これ以上の幸いはない。

もう少し、内面的な声Vを記してみよう。八七年秋以降の企画の過程を押し上げてくる何かの力がなかったとすれば、このような統編について構成や註を考えることもなかったであろう。もしかしたら、私の発言は不可避免的になされたA場Vで消滅してもよかったのかも知れない。しかし部分的にせよ、私の発言がA V闘争過程の一つの特性を示すもの

のとして残ってきている意味を、不十分さへのためらいを越えて、追求していかないと、発言してきたA場Vの生命(これを全く新たな時・空に生かしえない世界は滅びよ!)に對して申し訳ないという気持ちの方がつよいので、刊行に踏み切った。

また、刊行にかかわる問題点について記すと、批評集の刊行過程においては

- ① 印刷の読みにくさを、原本性への同行巡礼の契機として
  - ② AカンパVとの交換必要性を、自他の表現過程の被拘束状況を突破する費用として
  - ③ 110三出版への印刷作業の委託を、闘争の原初性回路への批評的視点として
- それぞれ運動させる方針を企画の基底においていたのであるが、表現集や発言集のA V版統編の刊行過程においては、前記の三項目を、さらに厳密に考えなおすことを迫られてきている。過渡的に全ての刊行作業を、とりあえずA批評集Vの水準で展開してみるが、これについても読者諸氏のご意見を待つ。

(9と14は量的に多いので、部分的に収録したが、希望者には全体をコピーして配布可能。13は貸出し回覧可能。ただし、10と12は京大A三六七空間から留置中。  
また、19の参考資料の原本は八五年一月の岡山大学祭連続シンポジウムで回覧中行方不明になっているが、対応する資料は、同時代建築研究会を媒介して入手可能。)

一九八八年一月

かって「日付のむこうへの出立」というビラをかけたことのある私にとって、今回の試みは、日付それ自体のリスト化というよりは、日付的なものの根拠を対象化してみようとする方向性を帯びており、これまで刊行してきたパンフ群に関して、総体的な自己批評の視線を投げかけてみる場合の方法の一つという意味をもっている。従って、

(1) これまで刊行してきたパンフ群を読む人たちにとって日付的な註として役立つ。

(2) 今回の年表と写真を素材として、より包括的なものを作成する人たちが現れる。ということは勿論、歓迎するけれども、それ以上に、

(3) 固有の日付や光景のむこうに存在しうるテーマの追求へ応用。

に共闘していただきたい。

前記の各項目に交差してくるヴィジョンを記してみると、

(1) について：これまで刊行してきたパンフ群を読んできた人たちに、パンフの存在を知らない／知らせない人たちの目を想定してほしい。一例を示すと、神戸大学が70～80年代に出した「何十年史」とかいふパンフや退官教授の回顧録には、「紛争時の被害や苦勞」は必ず抽象的にのべられているが、具体的な闘争経過や固有名詞には触れられないまま、まるで存在しなかったかのように処理されている。これは、ある意味で、裁判所やマスコミの処理よりも悪質であろう。

(2) について：しかし、前項の水準は始めから予測しえたのであり、すでに69年2月2日の〈情況への発言〉は、特定の大学や、大学という特定のジャンルを越えてなされた提起であった。問題はむしろ、このパンフに出現している日付や写真は、あくまで私の軌跡から把握した経過総体の断片ないし影であり、多くの読者の共闘によって補充しなければならないことであろう。その場合、いま、このような形態で素材を提出させるように働く何かの無意識的な大きい力の波動に注意深くあることが不可欠と考える。

(3) について：固有の日付や経過についての記憶が不確定であるために、作業の必要から、何年も手にしたことのなかった資料群を調べている過程で、思いがけず別のテーマの現在性に出会うことがあった。これらに関しては、あらためて展開する構想を立てているが、ここでのべておきたいことの一つは、固有性についての作業軸に、思いがけず訪れるテーマを含めて対象化しないと、この作業は普遍性を持ちえないだろうが、この認識は固有性についての作業によってこそ、もたらされていることである。この関係は、〈大学闘争〉の特性でもあるのだが。

一九八六年三月二四日に生じた、というよりは権力によって仮構された刑事事件の公判に関する証言に焦点をあててパンフを構成してみた。

上巻の内容を目次風に記し、註を加えると次のようになる。

起訴状：1～2ページ（批評集α篇79ページの制裁決定と併合して把握してほしい。）

検察官の冒頭陳述書：3～8ページ（「被害者」の警備員の偽証供述から導かれた作文）

現場見取図：9ページ（物理的な距離以外の説明は虚偽である。）

証拠等関係カード：10～20ページ（法廷に提出された証拠の処理の仕方を示す。検察側が申請した書記官33、警備員34～38は全て採用され、事実を反する証言を共謀的におこなっているのに比べて、弁護側が申請した裁判官1～2、書記官3、廷吏4、警備員5～6のうち、職場を変った3が一定の客観的な証言をした他は全て却下されている。非裁判所職員7～23から8人が採用され、多いようにみえるが、7、15のみを採用して終了しようとする審理過程に、88年3月に辞任するまでの旧弁護人を媒介して8、13、16、19を、新たな国選弁護人を媒介して22、23を出現させた経過と、弁護人を經由せずに、歌手および裁判長のみを申請したまま第14回公判（88年1月）以後ずっと不出頭している被告人の保釈取消を裁判所に実行させていない経過の双方に、22を中心とする仮装被告団の努力が大きく関与している。）

弁護側申請証人7が証言に際して提出し記録に添付された紙片：21ページ（89年3月提出のものは、この事件の重層する諸テーマを、それらが発生する時間構造ごとに対等の比重で対象化する場合にのみ刑事事件としても審理しようという、普遍的に應用可能な視点を示唆しており、89年6月提出のものは、87年8月に採用されていた証人が、この段階では証言を開始せず参加者総体に提起してきた問いかけを開示している。）

弁護人請求証拠24：22～25ページ（証人22が証人7と連続的に証言するために作成した証人7の証言記録への補充と訂正リストで、証拠27と共に〈訂正〉論の素材である。）

同前25：26～31ページ（証人22が証言前に被告人へとどけ、法廷でも応用した文書）

同前26：32ページ（同前。それぞれ準備した文書と実際の発語の変化と飛躍に要注目。）

同前27：33～35ページ（証人22の証言記録への補充と訂正リスト。10月提出分を含む。）

同前28：36ページ（証人22が提出しようとした証拠に関する説明書。検察官が不同意したために証拠と説明書は弁護人によって撤回されている。）

下巻には証人22の証言記録の全てを収録した。上巻と別にしたのは、関連資料と対比して読みやすくするためでもあるが、より本質的には、この事件に関わるさまざまな未対象化テーマの厚い壁を爆破するには、関連資料の水準から迫り上がる証言記録のみを、総体性の密度と息づかいを込めた一冊として開示する方がよいと判断したからである。

証言が法廷では終了した段階で、やっと視えてくる未証言領域や証言の特性について、断片的に列挙しておく。

一：未証言領域は無限にある。しかし、それは、無限にあるけれども証言しえていないというよりは、私の証言によって初めて未証言領域の拡がり、全ての人の証言条件の未成立性の深さで開示されつつあるという意味である。狭い法的な範囲に限っても、このことに最もよく気付いていたのは裁判官であり、かれらは私の証言が形式的な審理の儀式を内在的に粉碎していることを、検察官や弁護士よりも（！）了解している。気配をみせていた。そして、それ故にこそ、有罪判決を出さざるを得ないであろう。この有罪性を最も信じていないのは裁判官であり、それにより、かれらは永続的に（被告人）性を背負い、私たちの（真実）に敗北した（証人）の運命を生きるのだ。

二：この刑事公判は、具体的審理なしに終了したA367系裁判（特に1）の実質的展開の質を帯びているが、さらに私にとっての証言法廷は、公開の制裁裁判を実現し止揚する場でもあった。また、一九八八年一月以来、法的被告人が不出頭し、傍聴席にだれもいないという異質さのために、私は、被告人や傍聴人や未採用の証人の総体を仮装する存在として法廷を占拠することになった。証言時および終了後の何回かの公判における唯一の法的非専門家である私に対する嚴重な警備体制は、この事態の得体の知れなさに対する裁判所の警えを示している。ただし、この警えの質が疎外された低い水準のものであることはいうまでもない。私の証言は偽証の本質のみならず、関連する全領域を射程距離に含んでおり、眼前の警備体制は、あらかじめ無視し解体されている。

三：私は八六年三月の事件発生以来、八九年七月の証言開始まで、この刑事事件の法廷にずっと非存在してきた。いいかえると、私の証言は非存在状態からの出撃過程である。この変換の質は、法的被告人や、これまでの水準の公判参加者が本質的な参加条件を實現しえず法廷に非存在している状態と、この状態のままで判決を急ぐ権力の双方を同時に突破しようとする方向性に生かされている。そして、重要なことであるが、私は証言を、この事件の幅での当事者（テーマ）の救出（展開）のために開始したのではない。証言プランの本来の力点は、むしろ次のところにある。

- ①みずからの、より深い（罪）の開示を媒介してのみ、法的な罪を仮構する権力とたにかい得るという姿勢は（甲山）事件の公判過程への提起でもあり、
- ②みずからの、このような（罪）が全ての人々によってまだ実行されていない困難さの根拠を問う方法は（反日）の戦士たちと共闘する組織論の序でもあり、
- ③準備した後に集積する言葉と、準備せず、ある瞬間、ある場で思いがけず訪れる言葉の差異の力学を（法廷）外的全領域へ応用していく試みである。

## あとがきへの補充

法廷の酒バックやタバコ、証人控室の壁のタンポポの絵やマジック・ペンについては、極めて不思議なことに、裁判官も検察官も弁護人も質問しなかった。私としては、これらの人々からの質問があれば、それらに触れたり、保存している人と共に証言する、と対処するつもりでいたが、この証言が本当は一番おもしろいはずである。

証言終了後、近松門左衛門の「曾根崎心中」の舞台である、お初天神の境内を歩いている時に、いくつかのヴィジョンが浮かんだ。一つは、これだけ証言したのに有罪の判決が出たら（仕事人）の出番だな…というもので、これは自分に対するいくつもの有罪判決の前後にはなかった情念の噴出を伴っていた。もう一つは、かりに劇としてこの事件を作品化する情況が可能な場合には、各登場人物は作品化の必然や、打倒すべき構造を理解していることになるが、あの裁判官や警備員らが、そのような（作品）の演技を今すぐ自覚的にはなしえない落差にこそ、かれらにとっての（革命）の根拠が確実に存在するのではなか…というものであった。その後、もう一つ、前記の二つを統一し、飛翔させるヴィジョンが生成しつつあるが、共闘しうる主体の質問に対してのみ開示していきたい。

権力をもつものが、どのように根底的な提起を受けても、無視したり、対応を時間的に引き伸ばしたり、提起の総体でなく最も対処しやすいところを浅く切り抜けようとする例を私たちは、いやという程みてきた。しかし、同じ例は、主観的には反権力のつもりの人々にもあるし、場合によっては、より悪質である。これらの総体と戦う時の（～）を共有しようとする限り、どのような批評も、この証言集の企画主体は、共闘のあいさつとして歓迎する。

このパンフは、これまで刊行してきた系列との関連で把握すると、上巻は表現集、下巻は発言集の要素を含みつつ、全体としてα系の批評を内在的に転倒する反α系批評集として具体化している。既刊の各系列からの、このような（はみだし）方は、このパンフの内容が、これまでの（～）公判過程の展開から未知の過程へはみだしていく必然ないし祝福と、どこかで対応しているであろう。

## 追悼集への序文

菅谷規矩雄の死後に現われた新聞や雑誌の追悼文の全てに、私の影が全く落ちていないのは、奇妙な、しかし決定的な特性である。私の影などどうでもよいとして、六十年安保闘争や七十年前後以来の大学闘争に対する菅谷の死力を尽した関わりに自らの現在を対置させえない追悼者たちは、葬儀への参加や、追悼表現の発表によって菅谷をもう一度死なせ、それにより自らの久しい以前からの情動的な死を公開した。このようないい方は、かれやかれの追悼者に対して非礼であろうか。火炎の中で本来の姿に再生したであろうかれは、きっと否定してくれる、と私は確信している。

この確信とは別に、葬儀の実行主体が日付の設定に詩力を尽したことも指摘し、感謝しておきたい。葬儀の日付が、死去の一ヵ月以上も後の九〇年二月二日であることに戸惑いを感じた人は多いはずである。詩人の吉増剛造は、弔辞（現代詩手帳90年3月号に掲載）の中で、おおみそかの夜に死去を聞き、一月二日に葬儀を予定されている寺へ行ってみたが誰もいなかった、とのべている。私の推測では、二月二日の日付を決めたのは、葬儀委員長的位置を不可避的に担った北川透（を媒介する）であり、私が〈情況への発言〉を行った六九年二月二日や、七六年に六才で永遠に巡礼した松下未宇が生誕した七〇年二月二日を意識しての設定であろう。菅谷の死を〈情況への発言〉としても位置づけ、未宇的な〈生誕〉としても意味づける試みであったはずである。直接には葬儀の場へ現われないであろう私への配慮でもあったと思うと涙があふれそうになるが、それでも冒頭のように宣言しておきたい。この宣言によってこそ、菅谷は死による固定化を越えて、論議と創造の契機であり続けるであろうから。異議は全て引き受ける、〈菅谷〉と共に…。

前述の吉増剛造は、続けて「でも、きっと間違えてといえないかも知れないですね。」と、無人の空間の風の音から菅谷の場所を、無名であった頃の無時間性への親愛をこめて聞きとっている。一方、無名段階以後の菅谷に出会った瀬尾育生は追悼文（あんかるわ90年4月号に掲載）で、他人の死に、これほどしつこく付き合った経験はなかったが、そうしながらも、それがどこか許されないことであるような気持ちを消せなかった、と書いている。吉増と瀬尾は、菅谷の情況性を全く把握しえない欠損（吉本隆明のみが、ある水準でなしえている。）の代償としてではあるが、菅谷久子の情念に接近しえている。

この追悼集では、追悼（集）概念の転倒の試みをいくつか開始している。基本は、これまでの菅谷追悼の方向性や内実を、あえて全否定することであり、方法としては、87年以來の松下昇（に関する）批評集の試みを、〈私〉としての菅谷を媒介して、かつ、次第に無視し忘却されてきているが今こそ視線を集中すべき資料の〈遺稿〉集として具体化することである。この視点の拡がりからパンフをはみだしつつのべると、すでに私は89年1月の概念集1〈文学〉の項目で、生前の菅谷への〈追悼文〉としての提起をしており、90年5月の概念集3〈韻律（の越境）〉の項目で、死後の菅谷を復活させる提起をしている。これらを受け止めうる者こそが、かれの共闘者として生き続けうるのだ。

あとがき

このパンフの刊行作業は、内容に力点を置いて把握すると、序文に記した意図から開始しており、この意図や作業によって更に見えてきたことを後に補充していくが、刊行過程自体が帯びている意味について先にのべると、

①批評集プランの菅谷を媒介する応用であると同時に、概念集の3から4への移動に際しての過渡的演習でもあり、追悼(集)概念の転倒の試みは、その一例である。

②今年の夏は、いくつかの困難な問題と共に、果てし無く続くのではないかと思わせるほどであったが、このパンフ刊行作業へ意図的かつ実験的に集中することにより、それらの問題を無意識的に異化しつつ、突破する方法への示唆を獲得してきた。

③菅谷に関して刊行委が所持している資料は、今回のパンフで開示したものの範囲に勿論とどまらない。それは量的にのみならず質的にもである。読者の質問に提起に応じて今後の続篇を共同で具体化していきたい。その作業は、未踏の表現論や情況論と深く交差してくるはずである。

パンフの内容というよりは〈外容〉について、刊行過程で考えたことを更にのべると、菅谷自身ないし菅谷を評価する人々の多くは、かつて北村透谷が、明治時代の政治活動に挫折して文学に回帰した意味を、そのまま現在に平行移動させて判断基準としているようであるが、この発想は転倒されるべきである、と私は提起したい。一気にいい切ると、六九年以降の過程で政治から文学へ回帰するのは、それ以前の時期における文学から政治への移行(透谷を無視し抑圧する立場の合理化)に相当するのではないか。そして、へゝ闘争と呼ばれる過程は、闘争つまり政治の領域での持続を特性とする非文学的活動であるともみなされているかも知れないが、本当は、既成の政治も文学もも権威ないし制度として否定している故に闘争(あるいは理解しがたい提起)ともみなされることもあるに過ぎない。まだ出現していないより高次の視点に波動からみれば、透谷の苦闘に安易に、安全に依拠する者たちより、私たちの方が、はるかに透谷の苦闘や表現的達成に近いという確信がある。いや、そんなことは、もはや問題にするまでもない場所まで、私たちが到達しない漂着しているにもかかわらず、菅谷を喩とする他者や世界に、このことを気付かせるまでに至っていない非力が苦痛なのだ。このあとがきでは、まだ、これだけしか記せないとして、これだけでも記しているのは、追悼集からの祝福であり、私たちの今後を照らす光でもある。

## 概念 (1)への序文の位相で)

一般的な辞書などでは、概念について、同種の多くの事物に共通する本質を、経験なし思考を媒介して言葉によって抽出したもの、というように説明している。

この概念集を作成する契機をふりかえってみると、同時代建築研究会(東京)の企画である「ワード・マップ 現代建築」に、ある必然から関わることになりハバリケードV、ハ法廷V、ハ監獄Vという三項目の統一的な不可避性を提起しつつ執筆を担当する作業の中で、建築概念に対して門外者として(あるいは、門外者であるからこそ)内在的批評をなしうる手応えを獲得しえたが、同時に、常に物質性との拮抗において概念をとらえようとする人々に比して、私の二十年の試みの抽象性へ偏差を深く自覚した。

前記の企画との同時代性を帯びて、批評集(さらに、表現集や発言集のハV版や、それぞれの続篇)の刊行や討論集会の企画が、二十年の対象化作業の基軸として進行していたことと相乗されて、前記の執筆体験は、これまで私が具体的な切迫との関連において発言したものの記録、マスプリして配布した文書、刊行してきた通信などを、他者性の総体から把握しなおす視点を与えてくれたのである。

一つの仮定を試みよう。これまでのハ松下昇Vの全表現を大学闘争(全く良くない言葉であり、表記や理解の仕方を変換しなければならないが、過渡的に用いる)に関する事典として、あるいは概念の索引として読むことは可能か。それは、まず不可能であろうし、説明的な位置の対極で表現してきたのだから当然かも知れない。ただしハ松下昇Vの全表現の中に、大学闘争というよりはハV闘争過程ないし、それを不可避とする情況に現れた基本的な概念が全て含まれていると仮定してもよいのではないか。いや、あえて仮定すべきではないか。なぜなら私たちのくぐってきたハV闘争過程と、はるかな異時・空間に生起しうるハV闘争過程に共通する本質を、経験ないし思考を媒介して言葉によって抽出することは可能であり、必要でもあることを、前記の二つの企画に私を参加させてきた経過の根底に潜む力が示していると確信したからである。

このような確信に支えられて、ハV闘争過程を思い描く時に訪れる概念の言葉化を、まずハフィクションVの項目から開始してみた。建築に関連する前記の三つの概念の物質性・具体性から最も遠い(それゆえ最も近いかも知れない)概念として。その後いくつかの項目を作成しつつ、あらためて痛感したのは、たんに概念の解説ではなく、ある概念の生成してくる根拠や回路を共有する度合で了解しうる言葉で表現しなければならないし、しかも、はるかな異時・空間にいる、全く予備知識のないハ私Vが了解しうる言葉で表現しなければならないという困難である。しかし、順不同のまま、あふれかえり律動する概念の集合を少しずつ文字に変換していく作業は、ハ69V年前夜のエロス領域の感覚と、どこかで共通していることも記しておきたい。(英語でconceptionが「概念」の他に「受胎」を意味することの意味)

ところで、概念とは、こちらが把握したい時に把握できるのではなく、ある瞬間、否応なしに、こちらを把握してくる本質をもつのではないだろうか。ドイツ語では、概念に相当する言葉は Begriff であるが、これは、 begreifen (つかむ) から派生しており、ある示唆を与えてくれる。ハイネも「私は自由の奴隷である」というロベスピエールの告白を引用しながら、「理想が我々をつかむ」時の抗らいがたい力について語っていた。(表現集152ページ参照)

前記の  $\wedge$  理想  $\vee$  は、 $\wedge$  概念  $\vee$  とは異なる概念であるが、双方を共通に動かす力学が感じられる。この力学をこそ追求しつつ、この概念集の作業をおこなっていききたい。

従って、 $\wedge$  概念  $\vee$  という概念を  $\wedge \vee$  化して応用する場合、観念や想念や情念というような心的なレベルの動きと、それとは無関係に動くようにみえる他者総体の存在様式を同時にとらえていかなければならないだろう。

それと共に、概念集の作業に際して、今は微かな予感としてしかいえないが、

$\alpha$ —概念集の項目を、これまでの  $\wedge \vee$  闘争過程の表現を全て再検討しつつ抽出するだけでなく、全表現の偏差を対象化しうるものを選び、未出現の項目へ応用する。

$\beta$ —既出現し未出現の項目は、名詞とは限らず、全品詞にわたり、さらに文体く構成くジャンル、この概念集に交差する現在く未来の幻想性総体を対象とする。

$\gamma$ —ある項目を、まず提示して記述し始めるだけでなく、なにものかに促されて記述していく時に向こうから現れてくる像や音やくに気をつけ、それを作業の基軸とする。

というような項目に力点を置くことになるのは必然である。

## 概念心集 (2) への序文の位相で)

概念集・1を刊行してから、次のようなことが気になった。項目別に記すと、

一 このパンフに現れている項目群の集合の排反領域は何であり、排反領域の可能な限り広くを深く占拠していくにはどうすればよいか。

二 これまで人間は「概念集」にどこかで対応する試みをさまざまにおこなってきたが、これらの言語表現や表現総体の構造は、どこへ向かっているか。

三 私たちの発想や存在様式が変換する瞬間に最も力を及ぼすもの、そして私たちの発想や存在様式の中に最も長く残るものは、概念ではなく反概念としての像なのではないか。

これらのヴィジョンが、項目とか言葉になる以前の場所ですらめいていたのを主要因として、概念集・2の可視的な作業の殆ど進行しない段階が持続した。

いま、やっと、前記の三項目に(夢の中で模索したり、メモに記したりする水準を飛び越して)いきなりワープロに「書く」という作業によってたどりついているので、これを手掛かりにして、半歩でも先へ進んでみよう。この「半歩」性は、すぐに記述しうるものではないが、それと共に、常に渦まき、表象化しているものでもあるから、ここでは二月に打っておいた「概念と像の振幅」を、次ページに模索の開始点として掲げておく。

註一「概念」の像よりは「概念集」の像に、「私の」よりは「表現情況の」重力が集中していると考えている。また、概念と像は、静止的に対応させて関連をとらえるよりも、時間(音を含む)を媒介する領域に入りこむ、ないし、その領域を突き動かそうとする過程で関連をとらえる方がよいのではないか。(「瞬間」の項参照)

二「概念と像の振幅」で二月に予感していた「集(映像集)」は、五月の「神戸大学闘争史：年表と写真集」としても現れており、また、これまでのパンフ群が帯びている放射性的時間から包囲性的時間を発見して、六月に批評集・α続篇を構想したのは、時間の像と概念を往還する試みの一つでもあった。

三 これまで刊行してきたパンフ群は、それぞれの位相で他の系列と相互に包括しあっている。(討論過程のレジュメ等は希望者に配布可能)このような関係を強いる力を逆用して、概念相互、像相互、全ての試み相互の関係の追求をしていきたい。

## 概念の欠如が引き寄せる言葉

(3への序文の位相で)

ゲーテの「ファウスト」第一部で、メフィストフェレスが次のようにいう。

「概念が欠けている正にその場所に、言葉が丁度よい時に姿を現わす。論争も体系の構築も信仰も、言葉があるからこそ可能なのだ。…このような役割の言葉からは、表現された形態の微小な部分でさえも変更することはできない。」

この箇所は、前から気になっていた。さまざまな人がこの箇所を論じているが、どの翻訳や解釈にも納得しがたいので、あらためて原文で確認し、試訳してみた。久し振りにこのような作業をする気になった理由は、納得しがたさからというよりは、私たちの情況にとって、生きていくのに不可欠な概念が欠けて久しいのに、概念ないし、その欠如を指し示す言葉はなかなか現われず、いくらか姿を見せても、不安定にゆらめいたり、消滅したりする場合が殆どである事態への関心からであろう。

前記の言葉を引用する人々は、無意識のうちに、これをゲーテ自身の考えとして把握しつつ規範的に理解している。しかし、前記の言葉は、あくまでもゲーテの作品の登場人物の言葉であり、前後関係からは、ファウストに仮装したメフィストフェレスが、学生に神学を研究する心構えについて教える際に、学生の未熟さを挑発し、かつ神学への皮肉をこめて発語しているのであり、従ってファウストの言葉ではないし、ましてゲーテ自身の言葉ではない。それ以前の書齋の場面で、あらゆる学問に失望したファウストは、自分に光を与えてくれそうな本としての聖書を開き、冒頭の「はじめに言葉ありき。」について、

「おれは言葉をそれほど尊重する気になれない。」とつぶやき、はじめにあったのは言葉(Wort)ではなく別のものではないかと考えはじめ、感覚(Sinn)意図、意味という訳もあるけれども、あえて、こうしてみる。(だろうか、いや力(Kraft)だろうか、と思索した末に、行為(Tat)がはじめにあったとすればよい、と結論する。この結論自体は作品の序の部分の言葉であり、作品全体を媒介するゲーテの考えとはいえないとしても、前記のメフィストフェレスの言葉がゲーテの考えとは遠いことの例証にはなるであろう。

とはいえ、メフィストフェレスの言葉には、簡単には破棄しがたい重要な意味がこめられている。かれのいい方を契機として次のように言い換えてみたい。

把握すべき本質に、必ず言葉が対応するとは限らず、むしろ逆の場合を基本として想定した方がよい。そして、ある場、ある瞬間に、必要な対応する言葉が欠如しているにもかかわらず、時間と格闘しつつ表現を含む行為を強いる力は避けがたい感覚で迫ってくるけれども、この具体化を、自他の存在条件を交換しつつ行えば、はじめて言葉に生命をもたらさう。

この方向において、ゲーテの作品の登場人物を媒介するゲーテ自身の模索を、私たちの概念の欠損情況ないし概念(集)に関する作業へ困難を強いる情況へ生かしていきたい。

註一：ファウスト伝説は、本来、十六世紀前半のドイツを中心に流浪した、非ないし反ヨーロッパ的な実在の人物に根拠をもっており（これを神と悪魔の、前者の勝ちを自明とする賭の素材として扱うキリスト教的発想に対しては、旧約のヨブ記におけるユダヤ教的発想に対してと同様に、無性に怒りを感じる。これについては、別の機会に論じる。）、ゲーテの他にもレッシング、ハイネ、トーマス・マンなどが作品化を試みている。それぞれに特性と面白さはあるが、現代的には手塚治虫が死の直前（一九八八年）に劇画化した「ネオ・ファウスト」が示唆を与える。七十才の老人ファウストと、悪魔との契約により若返った青年ファウストの共通の背景に七十年前後の大学闘争を置き、メフィストフェレスを女性として描くユニークな作品である。しかし、第二部のはじめで死によって中断されたのは残念である。残念といえば、ないものねだりになるけれども、手塚は、大学闘争を政治的街頭闘争の前段階のゲバルト的風俗としてのみ取り上げ、どの情景の、どの断片からもファウスト的テーマを引き出しうることに気付いていない。しかし、かすかに気付いている私たちが、まだ作品としては一行も表現しえていない現実をこそ痛苦をもってみつめねばならないのであろう。

二：ゲーテの表現を読み返している過程で注目したのであるが、かれは晩年に友人にあてた書簡で、「動物は器官によって教えられるが、人間はそれだけでなく逆に器官を教え返す存在である。」とのべている。この言説に引き付けられるのは、私たちが、〈器官なき身体〉と〈身体なき器官〉に包囲されつつ苦闘してきたからであることに気付いているが、この項目に交差させて今後の追求方向をのべると、一つは、器官を概念に、身体を言葉に対応させつつ、双方のズレの現象の根拠を探ることであり、もう一つは、八九年末以降の東ヨーロッパの激動とみえる状態に直ちに概念を対置せず（バロック概念や、ポスト・モダンリズム概念との対比で論じたい衝動はあるし、意味もないとはいえないが）、むしろ私たちが、三分の一世紀前から、概念としては、現在の社会主義国家群の解体を（勿論、資本主義国家群の解体と同時に）スローガンとして前提してきたにもかかわらず、具体的展開の急速な（しかし別の面で驚くほど緩慢な）様相を予測しえなかった意味を、さまざまなレベルの同位相のテーマとの関連において実践的にとらえかえすことである。

本文で記した内容への補充を意味するのが普通であるが、ここでは更に次のヴィジョンを補充したい。

①本文の流れと同じベクトルでの補充と、本文の流れとは異なる（ズレ、逆、垂直など）ベクトルの補充がある。

②本文の表現主体と註の表現主体が同じ場合と異なる場合がある。

③本文と註の表現の構造が固定している場合と相互に他方の本文であったり、註であったり変換しうる場合がある。

これらのヴィジョンにこだわらずに、概念集4を作成する作業の最後の項目として何かをへあとがき風にかきとめてみよう。後でまた冒頭のテーマにもどるかも知れないが：

概念集1、2、3の序文に相当する項目を読み返すと、それぞれの段階のパンフにおいて、方向や範囲や内容に関して、それまでと異なるものを目指していることを自分では痛切に感じる。私の力不足から、読者にはたんなるバックナンバーの差として受け取られる可能性があるかも知れないが、〈私〉がこめようとし、応用しようとしているものは、意外に重要であるという気もしている。4では、何か新しい構想を立ててから作業にとりかかるという方法をとらなかった。むしろ、各段階のパンフごとにそれまでと異なるものを目指す、という方法と異なるものを目指した。意志的という以上の直感に導かれて。

構成や内容について最低限ここにとめていた原則があるとすれば、今やっと原則という概念で取り出すのであるが、一つは、〈私〉たちを根底のところ規定したり影響を与えたりしている概念（といい切れないものも含めて）に、いわば無重力状態で出会ってみようとする態度であり、もう一つは、それらに出会った場合には、自分の身体的な時間性の根拠に引き寄せて感触を確かめようとする態度であった。これが、どの程度の成果をもたらしているかは大変このころもとなし、提起はしたものの殆ど充分に展開しえていないことも自覚してはいるが、これまでにない解放感が、ふとかすめ過ぎるので、これだけでも今はよいのではないか、と思っている。

さて、冒頭の①〜②〜③と対比して、ここまで記したことは、どのような〈註〉でありうるだろうか。また、さらに今後どのような〈本文〉がありうるだろうか。様々の示唆や批評や提起を刊行委メンバーとしての読者にお願したい。

## 概念集5に関する序文

概念集シリーズを含めて、これまで刊行してきたパンフレットの序文は、自明のようにパンフレットの内容や構成に関するものであったが、ここにはパンフレットの表紙に関する序文を記す。概念集1〜4の表紙は「松下山概念集」となっており、それ以前のパンフレット群の系列である発言集、表現集、批評集なども「松下山」に修飾されている。これはパンフレット群の刊行の契機となったのが「松下山（に関する）批評集」であり、この場合には

の部分は不可欠であり必然であった。その意味は、①表紙の名称としてこのように掲げる他ない、というにとどまらず、②刊行を具体化する段階において一周してきている状況のテーマを

という媒介性においてとらえ、対象化していくのがもっとも切実であるという直感に支えられていたし、③これまで用いられてきた「批評集」が自明のように「特定の筆者による批評文の集積」を意味していた既成概念性を解体し、へ〜に関する個人、マスコミ、国家権力を含む総体から殺到してくる批評〜として、即ち「私から最も遠い私」による批評として、また、私が反批評へ向かうための素材として、

位相の批評集の概念を表現史の過程に転倒的に提出してきたのである。

この方向の波及効果によって「松下山（に関する）批評集」以後の系列のパンフレットの表紙にも「松下山」が最初に現われてきたけれども、表現の系列が多様化すると共に、とりわけ概念集の展開に対応して、「松下山」を概念集の前につけることへの異和が拡大してきた。できるならば全てのパンフレット、全ての表現から固有性を消去して本質的な無名と仮装を生きたい、という衝動が昂まってきたのである。これは、六〇年代末以降の過程の基本的な感性といってもよい。ただし、すでに公然と固有性を掲げて表現してきた過程の不可避性の位置は、これまで以上に引き受けていくのは勿論である。

前提の解説が長くなったけれども、このシリーズのパンフレットの題名を固有名詞に修飾されない「概念集」へ交換していく根拠は以上のようである。また、概念集5以降についてのみならず今後1〜4を増刷していく場合にも同じように題名を交換していくこと、および概念集は1以来、複（素）数性の執筆主体としての刊行委によって作成されてきているので、この意味からも題名の交換がふさわしい、ということを付記しておく。

今後とも題名に限らず、あらゆる表現〜発想〜存在の様式や根拠に関して交換の試みをしていくであろうが、その際の姿勢を今このような形態と契機において確かめているのであることを読者諸氏も記憶しておいていただきたい。そして、できれば刊行委への参加を！

註……この項目は〈序文〉、〈批評集〉、〈概念集〉の概念の交換をもテーマとしている。

〈批評集〉についてはその意味は前述から明らかであるとして、あと二つについてもう少しのべてみる。

〈概念集〉への〈序文〉(A)と〈概念集〉からの〈序文〉(B)の重層としてこの項目のタイトルは構成されており、(A)の表現主体は〈私〉でもいいが、(B)の表現主体はむしろ〈概念集〉というべきであり、概念集の1から5へ至る過程が、次第にこの〈序文〉を必要としてきたのである。ここに、人間以外の概念が表現主体になりうる契機と、概念集というタイトルやイメージさえも超えたがっている何かの身じろぎを感じとっていただければ、〈私〉としてもうれしい。概念集4には、このシリーズで例外的に序文がないけれども、それは今ここに記しているようなことをまだ言葉としては表現しえないままであったからであろう。表現や、それをもたらす過程の交換に際しては、このような事態がよく生じうるのであることをあらためて確認している。なお、序文という概念に関しては表現集へ／＼版に掲載しているヘハイネの序文に関する序論でもすでに論じていることも付記する。

以上のことを記してやっと、概念集5の内容について(A)の視点から何かを表現できそうな気がしてきた。概念集のシリーズは1の序文に最も基本的に示しているように〈私〉たちにとって根底的であると認識する時期(へ／＼闘争過程)の重要な概念をとり出して現在／未来形で応用するために開始された。この方針は5に至るまで持続しているが、同時に、この方針を媒介する作業が、はじめの方針へ影響を与えてくる。その手触りは各パンフの序文のみを垂直に読むことで明確にえられるであろう。とりわけ5においては、ある概念をとり出す作業と同じレベルの概念ないしイメージではなく、そのような作業の姿勢が引き寄せてくるテーマの手触りを表現しようとした。従って、個別の固定的な概念の把握や考察ではなく、本来の作業に交差してくるテーマが運動状態でかきとめられている比率が最も大きく、それは目次を見ても判るけれども、しかし、ある視点や体験を現在の様々のテーマヘエッセイ風に応用する表現と類似はしていても決定的に何かが異なることを読み取り、作業の原初性と飛躍に共闘していただきたい。

## 序文

何かの契機で概念集を手にする任意の読者を想定すると、個々の項目の記述内容(a)の印象はある程度の<sup>1</sup>こととしても、構成の中での項目の位置(b)や、その項目が出現する号数(c)の印象は少ない場合が多いのではないかと推測する。しかし、表現主体としていえば、a、b、cへ対等に比重を置いているから、読者にaのみではなく、a↖b↖cの総体性の中でのaを読んでもほしいのである。しかし、これはあくまで表現主体の希望に過ぎず、この〈へ乏しき時代〉に例外的な読者がaの断片に触れてくれるだけでも得難い成果といふべきであり、その読者がaの断片からさえもbやcや↖を重層的に読み取りうるような表現をこそ常に目指したい。もちろん、読者の中から表現に共闘する主体が出現して、この困難さと喜びを共有してくれることを同時に期待しつつ。

このように序文を書き始める要因は何であるかを考えると、1から5までの概念集の試みによって現時点で可能な試みの領域を基本的には一周している手応えがあるが、いくつもの次の構想が重層かつ未分化の状態で見えかくれているために、かえって具体的な作業が進行しない期間を(身体的↖生存条件のきびしさは別としても)潜る過程で、最も基礎的な作業として1↖5の概念群への追加ないし補充を、現在の段階でやっと視えてくる総体性の感覚からおこなおうとした。そして、まず個々の項目の内容(a)を読み返していく時に、パンフの項目群の中での位置(b)や、その項目を掲載するパンフレットの刊行時期(c)の重要性にも不可避的な読者として気付いたのである。

それと共に1↖5の記述や順序や時期のもつ意味にラセン状にもどる過程が6以降の試みへのバネとして作用すること及び現段階でその作用の力が最大の効果をもたらし得ること(概念集シリーズのパンフについてのみならず、また、パンフ刊行以外の活動領域についても)も1↖5への反応や包囲してくる情況性から確信してきた。このような位置から作業を進めているので読者諸氏もa↖b↖cを媒介するテーマに何が投影されてくるかを確認し、さまざまの提起をしていただきたい。

目次風の序文

概念集6の序文に記した方向をさらに加速してみる時に6までと比較してどのような変化がみえてくるか、どのような恒常性に出会いか、を確かめるのが7の試みであった。

概念集6の序文に記した方向を要約すると、1〜5の記述や順序や時期のもつ意味にラセン状にもどりつつ、その圧縮力を未踏の領域へのバネとしても応用することである。これがどの程度の成果をもたらしているかは作業の過程ではよく判らず、序文風の目次を最後に作成する段階でやっとある三応えとして感じられるようになった。この手応えの一つを7の項目と1〜6の項目や順序や時期との交差の状態として示すと…、

フィクション

1の続き、3の〈第n次作品〉と関連

2

言ひ

1の続き、2の〈無力感からの出立〉と関連

3

反日

1の続き、4の〈二つの反日処刑〉、5の〈爆風の現在〉と関連

4

訂正

2の続き、前項の続き

6

裁判所は裁判所(職員の偽証)を裁けるか

7

2の〈瞬間〉、3の〈発生の時間域〉と関連

神の後姿

1の〈オーパーツ〉、5の〈スピッツ処理に交差するモアレ〉と関連

10

母子サルのゲリラ戦

2の序文、〈メニユー〉、5の〈ゲームの不可能性〉と関連

12

表現としての数式

4の〈関係としての指数・対数性〉、5の〈幻想性と級数展開〉と関連

15

なぜ〈69〉年を基軸にするか

20

1の〈大学闘争〉、〈全共闘〉、その他6までの全ての項目と関連

## 表現過程としての医療空間

### (序文の位相で)

一九八四年十二月から翌年四月まで東京・大阪で監置・勾留された体験をへて、私は時の楔通信の第へ12号と第へ13号に「表現過程としての被拘束空間」を掲載したが、表記のタイトル、というより表現のヴィジョンは一九九二年六月から八月の入院・手術の過程に対応している。「表現過程としての被拘束空間」の冒頭では、このタイトルを必然とするヴィジョンの渦の焦点、その意味について①体験の具体例を表現の視点から把握する意図の他に、②被拘束空間自体が自分の取り組んできたテーマ群の再把握を迫る表現位相をもつ、と指摘している。これを今回の入院・手術の過程で応用すると、①医療空間での体験の具体例を表現の視点から把握し、②医療空間自体が自分の取り組んできたテーマ群の再把握を迫る表現位相をもつ意味を明らかにしていく作業の必然を示している。

しかし、たんなる平行移動的な応用にしてはならないという感覚が殺到してくるので、それを③として記述してみると、 $\alpha$ —過去形の体験や試みと対比して現在形の体験の試みに応用するのではなく、双方を未来形で包括しつつ、 $\beta$ —「表現過程としての空間」という場合の「の部分」を被拘束空間や医療空間に限らない任意の空間へ拡大し、 $\gamma$ —私だけでなく、任意の主体が応用し深化させる媒介にしたい、ということである。これをどの程度まで実現しているかは全く心もとないけれども、今後もこの方向への模索を持続していく契機をつくっているとは感じており、読者の方々のご意見、提起を期待している。

註一六月の中旬に、痛みはあまりないものの、鈍い疲労が全身を浸し、見知らぬ街をよるめき歩く自分の全身が秋のイチョウの落葉のように黄色に染まっているのにふと気付いた。救急車で運び込まれた病院で、医師は、胆嚢や関連器官が激しい炎症を起こしており、このまま放置すれば六月中に脳障害で死亡する可能性があった、と語った。その後も検査・手術の過程で何度か「死」の危険があったらしいが、いずれの場合にも私には同時的な自覚はなく、むしろ自分の表現してきたものの中へ潜り込んで読みなおしたり書き続けたりしていた。無意識に、また超高速度で…。これは、このパンフレットを作成している時についてもいえる。ただし、意識的に、ゆるやかに…。この意味からは、この号はたんに概念集7の次の8というよりは、自分の表現群、とくに入院直前まで構想していた概念集7の次のいくつかの表現の変換形態として把握するのが正確である。このことを的確に示すパンフレットの題名を思いつかないまま、とりあえず表紙には概念集8と記し、副題としてこのページの序文のタイトルを併合した。意図を読み取っていただければ幸いである。

## このことがさ

概念集シリーズの成立要因の一つに、建築用語集を作成する作業への参加があったことは1の序文に記したが、1〜7の方向性とは異質な構成と内容を持つ8が出現する重要な要因として入院過程があることは勿論である。しかし逆に入院過程と交差したからこの8が可能になったとかテーマが広がった、とはいえないと考えている。7までの必然が不定形として8の根拠に潜在し集積しており、いま8の形態をとっている表現は入院以外のどのような契機を媒介しても〈同じ〉展開を示しうるはずだ、という思いがある。それを踏まえた上で次のようにいいたい。

7以後の時期に医療空間と交差したことは、任意の他の空間への交差の仕方を深め、応用するという視点からは非常に適切であり祝福でさえあった。私は転んでもただでは起きない人間だが、今回は私を超える何かの力が私のために入院という契機を与えてくれたのだと感謝している。とくに監獄や宙宙や身体のテーマを89年の闘争との関連においてだれもが自在に往還することが世界を変えていく条件の軸である以上、私たちは例えば〈全共闘〉と〈全身麻酔〉、〈内科・外科〉と〈民事・刑事〉、監獄や学校や病院の〈トイレ〉と〈メニュー〉を同時に〈同じ〉言葉で論じなければならないだろう。このような概念の対的連関によって未踏の領域のかなりを包囲し占拠しうることを8の作業で確信したが、ここではその中から7までの必然と対応する項目を選んで提出してみる。

先程、入院以外のどのような契機を媒介しても、とのべたが、表現の姿勢ないし条件として7以後に予感していたのは、例えば、白い紙(ないし技術を必要とする機器)を前にして何かを表現しようと身構える態度は69年以降は無効であるが、現段階において二乗的に無効ではないか、ということであった。これは別にペン(ないし任意の表現手段)を捨てて実践を、という古めかしい発想とは無縁である。むしろ、筆記用具(ないし表現手段の全て)が無効な状態(広い意味での〈労働〉中―潜水中、墜落中、睡眠中などを含む。―)での表現行為の困難さが表現の内容や方法に及ぼす作用と反作用を把握しようとしていた、という方がヴィジョンとして正確である。なぜこのような予感を抱いたかについては今後の作業でより具体的に表現していく(あるいは意味自体を黙って生きる)であろうが、8においても基礎は提出し始めているつもりである。そして、8の試みによって、これまでの表現過程から少しでも踏み出していること、その結果として〈医療〉の領域の概念や関係をもわずかにではあれ転倒し始めていることに読者諸氏が同意しつつ、今後の作業への示唆を与えて下されば、大変うれしい。

まえがき

91年10月 刊行委員会気付 松下 昇

一九九一年六月二〇日に、救援通信最終号の刊行を記念する集会が開かれたが、それまでの経過を救援連絡会を軸として簡単に記すと次のようである。

69年に日大が小林氏を懲戒免職処分。(70年に神戸大が松下を懲戒免職処分)

71年に東京理科大が宮内氏を分限免職処分。(72年に都立大が菅谷氏を懲戒免職処分)

73年に関東学院大が河村氏を通常解雇処分。(徳島大が山本さんを、岡山大が坂本氏を

それぞれ懲戒免職処分。岡山大は70年にも荻原、坂本の両氏を五ヵ月の休職処分)

74年の一審で宮内氏が勝訴。(75年に新潟大が佐藤氏を懲戒戒告処分)

75年の二審で和解した宮内氏の設計事務所を事務局として76年3月に(小林・河村裁判を支える)大学教員救援連絡会が発足。(77年に京都大が竹本氏を分限免職処分)

80年から神戸大の松下処分に關する人事院審理の再開を求めて東京地裁へ裁判が拡大。

80年5月に69年5月開催に連続する大学闘争に關する公開討論集會。(主催も69年に連続して全都助手共闘連合。参加者は百数十名、徹夜討論にも数十名が残る。)

87年3月に相模女子大が五十嵐氏を依願退職させる。(救援連絡会は89年11月に知る。)

87年9月の二審段階で小林氏が和解。

88年12月の三審判決で最高裁が河村氏の上告を棄却。

89年2月～11月の會議で、松下から、救援資金の残りは、これまでの活動に關する重要な資料(救援通信のバックナンバー)を軸とし、年表をつける。)や各自の総括表現を収録するパンフの刊行と討論集會の費用に應用するのがよいと提起。

90年3月に、河村氏の病氣入院で遅れていた河村裁判報告集會。前記の提起が事前に行われ、會場で確認された。編集委員は田宮、山浦、松下。原稿は数回の督促の後で年末にやっと刊行しうる最低量がそろった。(広島修道大が五名の教員を懲戒解雇処分)

91年5月に印刷完了し配布開始。

前記のような経過をへて六月二〇日の集會が設定され、これまでのメンバー約三〇名に案内状が松下作成のレジュメと共に送られた。このレジュメは集會後に松下が作成した註と共に概念集5(91年7月)に掲載している。

なお、六月二〇日の討論について、松下のメモと記憶に基づいて記録原案を作成し、各参加者へ送って訂正し補充を依頼し、反応を松下氣付の刊行委に集積しつつ再構成した。記録原案は討論経過や発言の原型にできる限り近い表現であるが、再構成プランはかなり抽象度を帯びている。理由は3ページ以降の註を参照して下さいれば幸いである。註に連続してのべると、今回のパンフ化の試みは、註でのべた①②③を包括しつつ69年以来の放置されている無数のテーマを発語し集會の位相を媒介して対象化し始める契機をもっており、読者の意見と共闘により作業対象と應用の範圍を拡大していきたい。

あとがき

このパンフレットを刊行する情况的な位相について

刊行委員会 松下 昇

〈不確定な断面からの出立〉という副題をつけた感覚の根拠から記してみる。

①発言の記録、発言した人自身の記憶があいまいで不確定であり、それぞれの人の闘争過程の二十年のテーマ群の総体の微小な断面でしかないのは自明であるとしても、この発言は最終的な集約点でなされており、この不確定な断面から発言者さえ充分には把握していないテーマを取り出し展開する方法を具体化しない限り、この二十年の苦闘の本質は未来的な応用の契機を失ったまま拡散する他ないという直観があった。

②これまで私が刊行してきたパンフレットは、刊行の時期やペース、内容などに関して、基本的に自分の判断で作成してきたが、今回の試みは、刊行するかどうか、および内容の補充・再構成について参加者らの意見を聞きながらおこなう最初の試みである。この時の考察方向を徹底化すると、人間の全表現の中で主体の判断のみで可能なものと全ての関わりある者の意思確認によってのみ可能なものを振幅極限とする表現論へ至る。

③今回の討論記録のパンフ化を契機としつつ、時間的に遡行して、この二十年以上の私にとって重要ないくつかのもの、まだ文字ないしイメージとしては定着させていない発言の系列(大衆団交、集会、会議、法廷、対話、)の総体に向き合うことができるようになっていく。文書や発言にならないまま、それらを支え動かしている領域と往還する回路の対象化も。

以上の三項目は、副題をつけた感覚の根拠を示すと共に、今後の作業の方向をも示している。そして、この作業自体を多くの人と共同で展開する過程で、今はまだ気付かない次の〈三項目〉に出会っていききたい。

なお、前記に深く交差してすでに情况的な同時性として私が取り組んでいる作業のいくつかの具体例を記しておく。

α 同時代建築研究会から刊行予定の『ワードマップ 現代建築』の各項目(あとがきを非専門家を主要な位置におく拡大メンバーの批評を潜って再構成する試み。(関連する 45 ページを参照))

β 個人を表現主体とする作品はいつでも成立し流通可能であるという既成概念を超えて、諸幻想性領域の困難な錯綜する関係をラセン状に巡礼しつつ、その過程をも包括表現していく(第n次作品)の試み。(概念集4参照)

γ 死刑ないし無期懲役を確定してくる国家権力に抗する努力のささやかな萌芽として再審請求の申立てを任意の人が仮装被告(団)として構想し、裁判所のみならず、その解体をも審理しうる(大衆団交と、その対極のヴィジョンの統一的極限にある)審問の場合へ提出していく試み。(詳細は刊行委員会へ問い合わせ下さい。)

内容や刊行過程についての質問・提起などは左記へご連絡下さい。

〒657 神戸市灘区赤松町一の一 松下 昇 気付 刊行委員会

☎078・821・4984

刊行リスト(カンパ・一冊千円、送料別) 郵便振替口座〓神戸5・42929

松下 昇(についての) 批評集…計9冊

α篇(88年10月)とα統篇(89年6月) …α系は国家による批評

β篇(87年9月)とβ統篇(88年9月) …β系はマスコミによる批評

γ篇(4分冊、87年11月〜88年3月)とγ統篇(88年11月) …γ系は個人による批評

表現集へへ版(88年8月)と統篇(88年12月) …計2冊

発言集へへ版(88年9月)と統篇(88年12月) …計2冊

神戸大学闘争史―年表と写真集―(89年5月)

(3・24)証言集・上巻と下巻(89年12月〜90年1月)

菅谷規矩雄追悼集(90年10月)

時の楔通信第へ0へへ15へへ号(78年10月〜87年9月) および関連パンフ多数あり。

概念集1(89年1月)、2(89年9月)、3(90年5月)、4(91年1月)

5(91年7月)、6(92年1月)、7(92年3月)、8(92年11月)、

へ6・20討論の記録―不確定な断面からの出立―(91年10月)